

足守藩武家屋敷跡・Ⅱ

—足守小学校プール建設に伴う発掘調査報告—

2001年3月

岡山市教育委員会

『足守藩武家屋敷跡・Ⅱ』正誤表

頁	行・位置	誤	正
1	2 2	条 <u>理</u> 水田	条里水田
8	2 0	<u>陶</u> 磁器片	磁器片
1 2	溝 1	<u>口径</u> 器高	径 厚さ
1 2	溝 2	口径 <u>厚さ</u>	口径 器高
1 3	土坑 2 4	釉色： <u>2.5G Y7/1</u>	釉色：2.5GY7/1
1 3	土坑 2 9	<u>口径</u> 厚さ	径 厚さ
1 7	2 8	<u>地</u> 行	地形

序

岡山市は近年の広域合併の結果、わが国の古代社会において重要な位置をしめる吉備国の中枢を占めるようになり、古墳をはじめ多種多様な遺跡が所在しており、その密度は全国有数であると思われます。これら埋蔵文化財の保護保存は現代社会の経済成長に伴う宿命的な社会問題となっており、行政課題として埋蔵文化財保護行政の中心的施策であります。

岡山市教育委員会は、都市開発が増加の一途をたどる今日の状況のなかで、埋蔵文化財の保護保存と諸処の開発との調和を図るため、この数年来各種の遺跡の発掘調査を実施しておりますが、その社会的要求の増大の一途に対して有効な行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して鋭意取り組んでいる次第であります。

このたび報告いたします足守藩武家屋敷跡は、市立足守小学校のプール建築工事に伴って記録保存の発掘調査を実施致したものです。

発掘調査につきましては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と関係者各位や発掘参加者のご支援を受けて実施され、江戸時代の武家屋敷遺構を検出いたしまして、陣屋町足守の歴史を考える上で大変貴重な成果を上げております。

発掘調査の成果は発掘に際しての関係者皆様方のご指導とご支援の賜物であり、皆様方を始め調査担当各位に対しまして、心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめました調査成果につきましては、ご検討、ご批判を頂き、少しでも岡山地方の中世史および近世史の研究に寄与できるならば幸いに存じます。

平成13年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 玉 光 源 爾

例 言

1. この報告書は岡山市教育委員会文化課が平成6年6月20日から10月17日にかけて実施した岡山市立足守小学校建築事業に伴う岡山市足守641-1ほかの発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は高橋が担当した。
3. 遺物の実測とトレース、写真撮影、編集は高橋がおこなった。
4. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
5. この報告書に用いている方位は磁北である。
6. 図2は建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「総社東部」を複製し、加筆したものである。
7. 遺物・実測図・写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

目 次

第一章 位置と歴史的環境	1
第二章 調査の経過	4
第三章 遺構と遺物	8
第四章 まとめ	17

挿入図目次

図1 足守藩武家屋敷の位置	1
図2 周辺遺跡分布図	2
図3 調査区位置図	6
図4 発掘区域図	6
図5 土層図	7
図6 陣屋町絵図	18
図7 足守町旧藩圖	18
図8 屋敷地割推定図	18

図版目次

図版1：遺構配置図	19
図版2：土坑1・2・3・井戸1遺構図	20
図版3：土坑4・6・7・9・10・11・12・13遺構図	21
図版4：土坑14・15・16・19・20・21・溝2遺構図	22
図版5：溝1・土坑22・23・24・25・26遺構図	23
図版6：土坑27・28・29・30・31・32・池泉状遺構・溝3遺構図	24
図版7：土坑33・34・35・36・石列1遺構図	25
図版8：出土遺物1	26

図版9：出土遺物2	27
図版10：出土遺物3	28
図版11：出土遺物4	29
図版12：出土遺物5	30
図版13：出土遺物6	31
図版14：出土遺物7	32
図版15：出土遺物8	33
図版16：出土遺物9	34
図版17：出土遺物10	35

写真図版

写真図版1：上 調査区東半 下 調査区西半	36
写真図版2：上 土坑1・土坑2 中 土坑23 下 土坑24	37
写真図版3：上 溝3・土坑30 中 池泉状遺構 下 土坑36	38
写真図版4：出土遺物1	39
写真図版5：出土遺物2	40
写真図版6：出土遺物3	41
写真図版7：出土遺物4	42
写真図版8：出土遺物5	43
写真図版9：出土遺物6	44
写真図版10：出土遺物7	45

第一章 位置と歴史的環境

足守藩陣屋は吉備高原を源流とし備中地域の中枢部を南北に貫流する足守川が、山間から平野に流出する谷口部に位置する。現在は岡山市北西部に位置する足守地区は明治22年上足守、下足守、上土田の3村が合併して足守村となり、その後昭和31年に大井、日近、岩田、福谷の4村を合併し、さらに昭和46年に岡山市に合併されたものである。新岡山空港や山陽自動車道などの交通網の整備に伴い、開発が急速に進行し景観が大きく変貌しつつある。

足守地域で最も古い遺跡は縄文時代後期の土器が採集されている余町遺跡と足守深茂遺跡でこの時期の集落が河岸段丘上に存在していたものと考えられる⁽¹⁾。

弥生時代の遺跡は南坂遺跡、鶴免遺跡⁽²⁾などでも知られているほか背後の山間部には経塚墳丘墓や浦尾5号墓などの特殊器台を持つ墳丘墓が築かれる⁽³⁾。古墳時代には隣接する高松地域のような大型古墳は築かれないものの山間部には多数の古墳が築かれており、その勢力は連綿と維持されていたことがうかがわれる。

古代の足守は備中国賀陽郡足守郷に属し、備中の中枢部を掌握した豪族賀陽氏の本拠地とされている。足守地区の最南部大崎には大崎廃寺があり「水切り瓦」と称される白鳳期の軒丸瓦が知られるほか、飛鳥時代の軒丸瓦も出土しており、吉備地方でも最古の寺院の一群である⁽⁴⁾。平安時代以降は賀陽氏によって備中地域の荘園化がなされていったものとみられ、足守も足守庄として荘園化されている。京都神護寺所蔵の「備中国足守庄絵図」裏書によると嘉応元（1169）年に四至を確定し絵図が作成されたことが記されており、この時点で後白河院に寄進され荘園化されたものとみられる。寿永3（1184）年には散位阿倍資良の足守庄での私得分が神護寺護摩堂に寄進され、それを機に足守庄が神護寺に寄進され神護寺領としての足守庄が成立した。

足守庄域における発掘調査は1976年から1979年にかけて実施された延寿寺の調査と榜示の可能性が想定された遺構に対しての調査である⁽⁵⁾。その後1992年度には岡山市立足守幼稚園の園舎建築事業に伴う条理水田の調査が行われ⁽⁶⁾、1997年にはすくも山遺跡の調査が行われ⁽⁷⁾、古墳や中世墓、城郭遺構などが検出された。

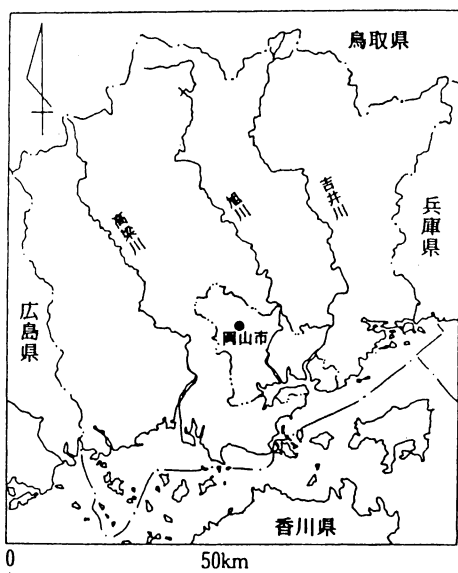
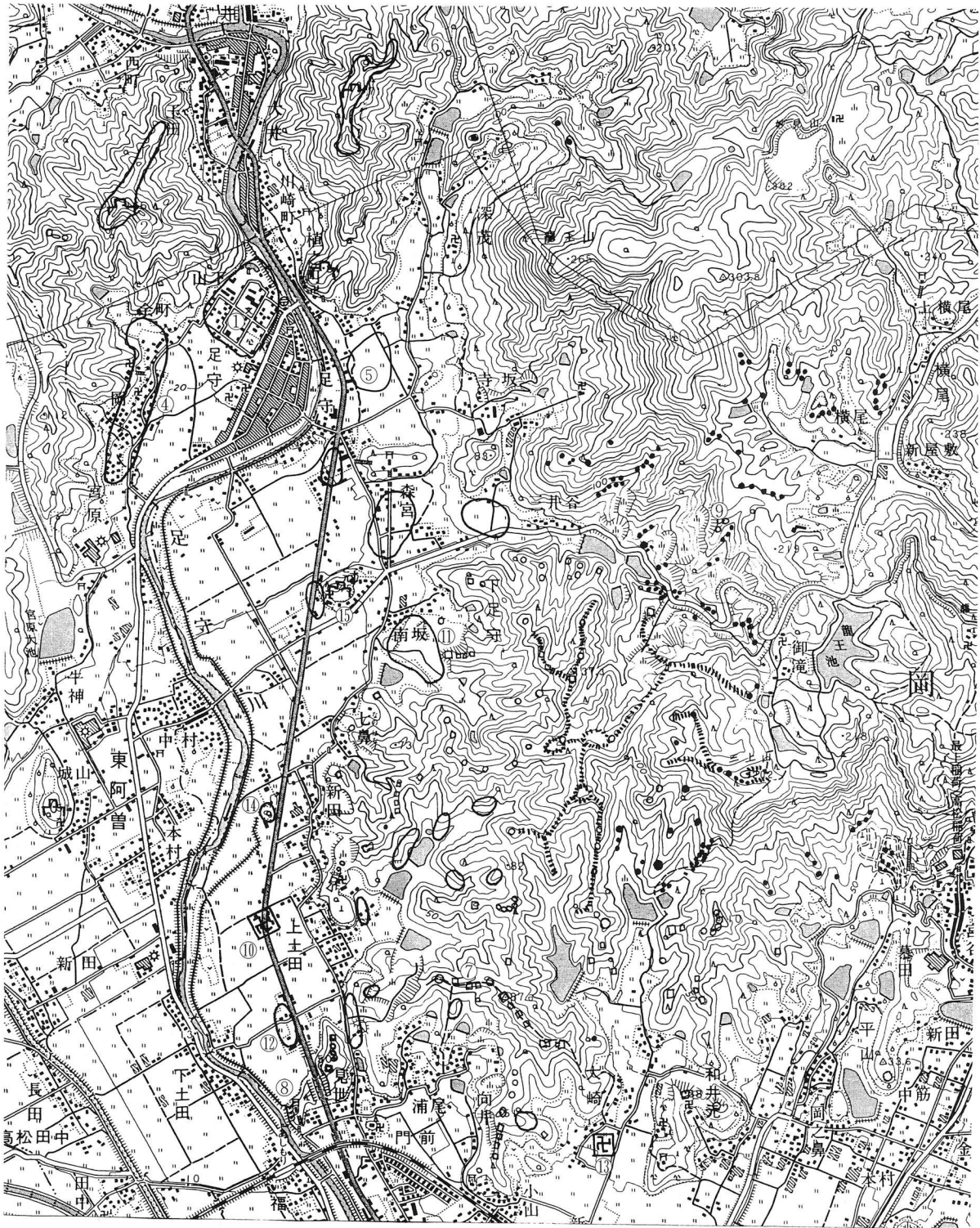


図1 足守藩武家屋敷の位置

戦国時代の備中は戦国大名の出現は見られなものの、延徳3（1491）年備中国守護大名細川勝久の下で起こった守護代荘元資の反乱以降その勢力は急速に衰え、有力国人層の台頭がみられる。これら在地の国人層は山陰の尼子氏や毛利氏の進出によってそれらと複雑に結びつきながら戦国時代末期には西の毛利氏と東の織田氏の勢力の接点となり、この地が直接衝突の場となるのである。

足守が戦場となったものとしては、天正10（1582）年「高松城水攻め」の前哨戦としておきた「冠山城の戦い」があり、東側の丘陵部には織田方の陣城と考えられる土累



- | | | | |
|--|--|--|--|
| 寺院
散布地
城郭
土層
白抜は前半期古墳
●は後半期古墳 | ①足守藩陣屋
②宮路山城
③鍛冶山城
④余町遺跡
⑤足守深茂遺跡 | ⑥経塚墳丘墓
⑦浦尾墳丘墓
⑧生石神社墳丘墓
⑨長坂古墳
⑩延寿寺跡 | ⑪南坂遺跡
⑫鶴免遺跡
⑬大崎廃寺
⑭すくも山遺跡
⑮冠山城 |
|--|--|--|--|

図2 周辺遺跡分布図

が残る。この戦闘の後足守は宇喜多氏の領地となるが、宇喜多氏が関ヶ原の合戦で失脚した後は、備前・美作51万石で岡山に封せられた小早川秀秋の実父、木下家定が姫路から2万5千石で足守に転封され、慶長6（1601）年足守藩は成立するのである。

足守藩は家定の長男勝俊の代に相続問題から所領を没収されるが、家定の次男利房が元和元（1615）年大阪夏の陣の戦功により足守藩を再興し、明治4年の廃藩置県まで木下氏を藩主として継承される。

足守陣屋の設置や陣屋町の形成に関しては、それに関する史料が定かでないため正確にはつかめていない。陣屋町に関する最古の史料は木下家に伝わる『陣屋町絵図』（図6）であるが、この絵図の作成された時期は延宝7（1679）年から貞享3（1686）年の間とされており、この時期までには陣屋町の形成が完了していたものと考えられる。五代藩主利貞の代（1662～1679）に足守藩の職制が整備されており、ほぼこの時期に陣屋町が形成されたものと考えられている。

陣屋町の景観は武家屋敷部分は明治時代以降、藩主の東京移住や藩士の離散に伴い急速に衰退し大半が畑地として転用されたが、国家老であった杉原家住宅と藩主の庭園で近水園内に所在する吟風閣は現在まで良好に保存されている。

足守陣屋に関する発掘調査は過去に足守小学校校舎部分と昭和63年度に実施された同校の体育館と給食棟部分の調査がある⁽⁸⁾。このうち後者では陣屋形成期の遺構は検出されなかったものの18世紀末から19世紀代にかけての建物跡、井戸、土坑等が検出され、土塀と生垣により屋敷の区割りが行われていることが確認された。さらに下層では中世の柱穴なども確認されている。

今回の調査では明確な建物跡は検出されなかったものの、陣屋町の実態を考える上で貴重な資料となるものと考えられる。

註

- (1) 小郷利幸ほか「足守地域の地域史研究」『古代吉備』第12集 1990年
- (2) 岡山市教育委員会が調査
- (3) 近藤義郎「弥生墳丘墓の実態」『岡山県史』原始・古代I 1991年
- (4) 岡本寛久『『水切り瓦』の起源と伝播の意義』『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社 1992年
- (5) 出宮徳尚・根木修『足守庄荘園遺構緊急調査・延寿寺跡第2次発掘調査概報』岡山市教育委員会 1979年
出宮徳尚・神谷正義『足守庄荘園遺構緊急調査・榜示比定遺構発掘調査概報』岡山市教育委員会 1980年
- (6) 草原孝典『足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1994年
- (7) 草原孝典『すくも山遺跡』岡山市教育委員会 1998年
- (8) 草原孝典ほか『足守藩武家屋敷跡』岡山市教育委員会 1995年

第二章 調査の経過

昭和59年に岡山市立足守小学校の校舎建築に伴い試掘調査を行ったところ、中世から近世にかけての包含層が確認され、校舎部分の発掘調査が岡山市教育委員会文化課によって行われた。その後、昭和63年9月から平成元年3月にかけて給食棟と体育館部分の調査が行われた。以上の経緯の後、同小学校隣接地にプールの建築事業が岡山市教育委員会施設課によって計画された。用地が周知の遺跡推定地域内であるため、文化財保護法の適用を受け、プール建築用地の記録保存による事前の行政的措置が必要であることから、その実施に対する連絡、協議を要請した。文化課と施設課で協議を重ねた結果、記録保存を平成6年度中に実施することで合意に達した。発掘調査の着手に先立ち、平成6年5月20日付けで岡山市長から文化庁長官宛に文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、同日付けで岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。

以上の経緯の基に、岡山市立足守小学校プールの発掘調査は平成6年6月20日から10月17日にかけて実施された。

発掘調査組織

発掘調査主体者	岡山市教育委員会教育長 奥山 桂
発掘調査対策委員	稲田 孝司（岡山大学教授） 狩野 久（岡山大学教授） 西川 宏（山陽学園教諭） 間壁 忠彦（倉敷考古館館長） 水内 昌康（岡山市文化財保護審議会会長）
発掘調査担当者	富岡 博司（岡山市教育委員会文化課長） 出宮 徳尚（岡山市教育委員会文化課文化財専門監） 根木 修（岡山市教育委員会文化課課長補佐） 神谷 正義（岡山市教育委員会文化課主任）
（調査員）	高橋 伸二（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）
（経 理）	沼 智恵（岡山市教育委員会文化課主事）
発掘調査現場作業員	赤木 悦子 秋田 高志 安藤 一枝 岩佐 ます 石井 基

木村 真紀
佐々木龍彦
田村 春子
森脇 和人
渡辺 賢治
出土物整理 古南 太基
玉光 加絵

調査にあたり、対策委員の先生方や地元考古学研究者のご教示、ご助言を頂いた。発掘調査の実施に際しては、岡山市立足守小学校から諸般の便宜に預かった。

報告書の作成にあたっては、草原孝典、乗岡実、的場勇の諸氏からは有益な助言を得た。諸処にご助成下さった方々に感謝する次第である。

経過と概要

調査地は足守藩主木下家の庭園である近水園の南側に位置し、プール建設予定地の調査区は東西約40m、南北15mで調査面積は700㎡である。発掘区の層序は調査区南側の東西方向の断面観察から得た。(図5)

この土地は調査直前まで果樹園として利用されており、明治時代以降に開墾されたと考えられる耕作土層と造成土層が認められ、2～4層直下の6層が近世面の基盤となる。近世面の遺構が形成される基盤層は近世以前の河道と考えられる砂礫層上に造成された土層であると考えられる。砂礫層より下では、近世以前の遺構は検出されず、昭和63年度の調査結果からも、近世以前には足守川の河道であったと考えられる。前記したとおり明治期以降の開墾や造成により地形は改変を受けており、明確な建物の遺構は検出されなかったものの、残存する遺構の時期は出土遺物から大半が18世紀後半から19世紀代の江戸時代後期のものであり、当該期の屋敷地であったと考えられる。

発掘日誌抄

平成6年6月17日 発掘器材の搬入
20日 発掘開始
7月4日 近世遺構面精査開始
8月26日 東半部調査終了
29日 西半部調査開始
9月5日 近世遺構面精査開始
20日 発掘調査対策委員会開催
10月14日 近世遺構面の写真撮影
17日 調査終了、発掘器材撤去

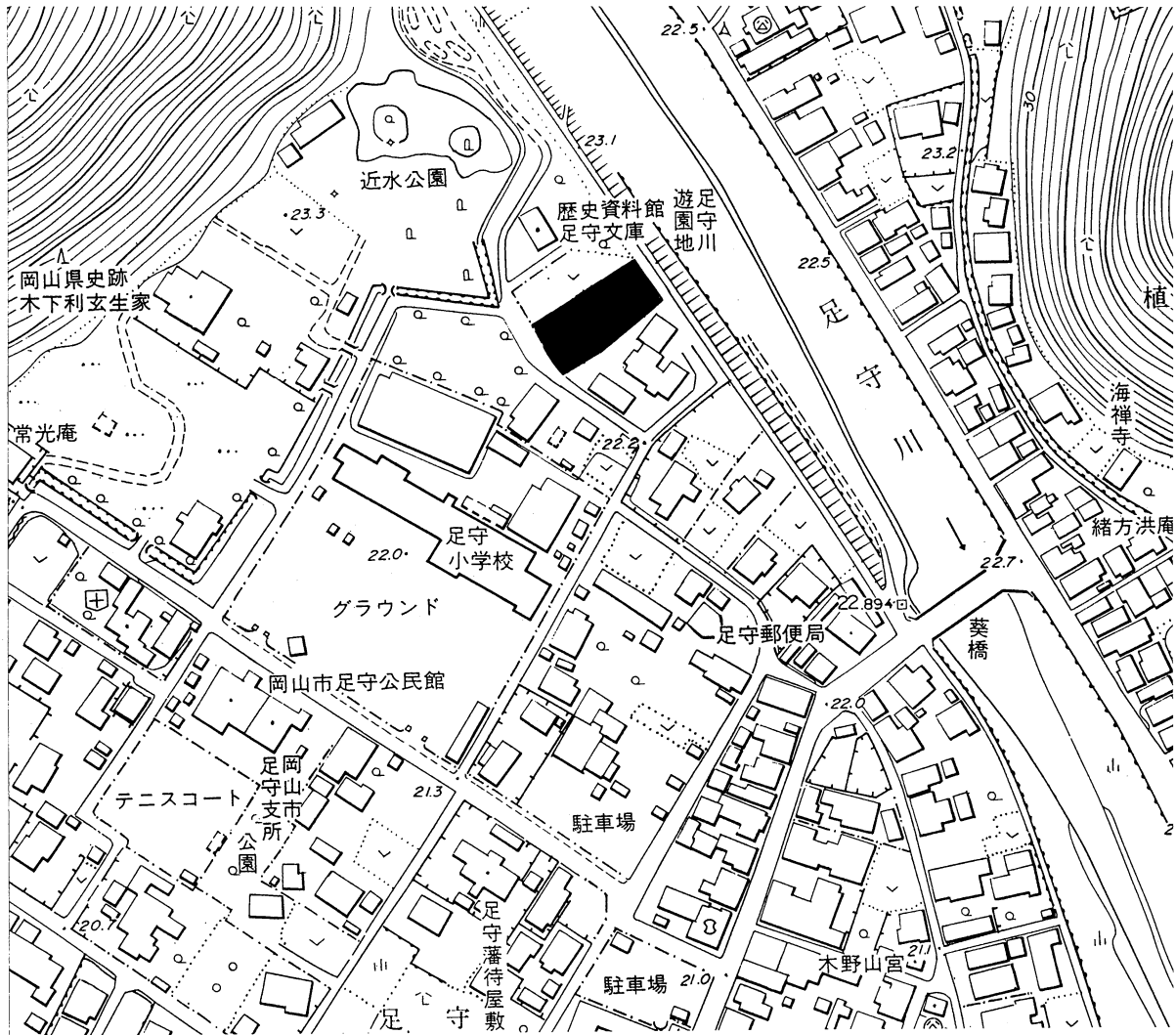


図3 調査区位置図

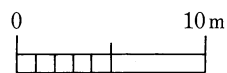
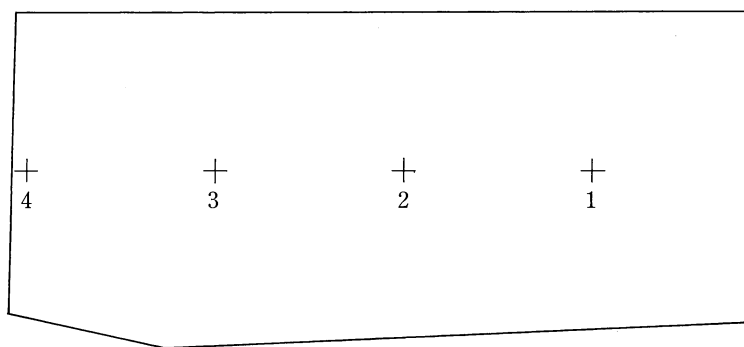
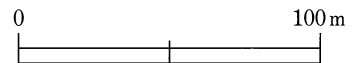


図4 発掘区域図

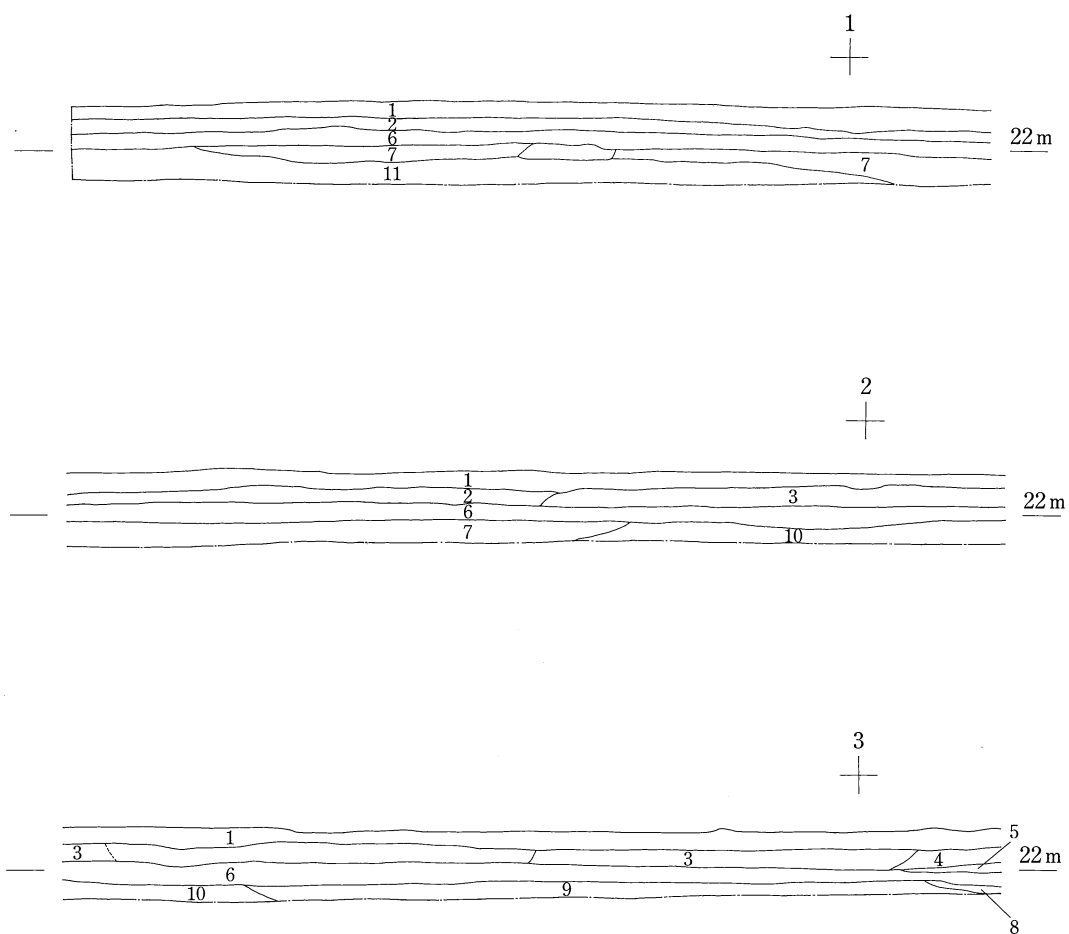
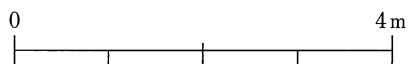


图5 土层图



- | | |
|-----------|-----------|
| 1 現耕作土 | 7 淡黄灰褐色粗砂 |
| 2 淡褐色粗砂 | 8 淡黄灰褐色微砂 |
| 3 暗褐色砂礫 | 9 淡褐色粗砂 |
| 4 暗褐色細砂 | 10 淡黄褐色粗砂 |
| 5 暗褐色細砂 | 11 淡黄褐色砂礫 |
| 6 淡黄灰褐色細砂 | |

第三章 遺構と遺物

遺構面は1面である。時期は検出された遺構より出土した遺物から、18世紀後半から19世紀にかけて形成された遺構面であると考えられる。近代以降に大きく削平をうけており、柱穴等が明確に検出されなかったため建物の配置が判然としない。また、調査区が限定された範囲であり、推定される屋敷地割りの内側におさまってしまうため、屋敷割りの区画を示す遺構も検出し得なかった。

遺 構

今回の調査で検出された遺構には、土坑・井戸・溝・池泉状遺構などがある。建物についてはわずかに残された溝の位置などから部分的な配置は推定しうるが、礎石が確認できなかったため規模や構造は不明である。

土坑は大半がゴミ穴として掘られたものと考えられるが、貯蔵もしくは便所として使用されたと推定されるものには漆喰を貼ったもの、桶を埋めたものなどがある。多量の礫が検出された土坑については建物の地形もしくは流し場などが想定される。

井戸は石組みのものが1基検出されたのみであるが、この井戸は近年まで開口していたものを土地の所有者によって埋められたものであると伝えられる。

溝は建物に付随する雨落溝や排水溝のほか防湿のために掘られたと考えられるものなどがある。

以下各遺構について説明する。

土坑1 (図版2) (図版8-1~3)

北端部は調査区外に出るが長軸6.2m、短軸2.9m、検出面からの深さは38cmである。長さ10~20cm大の角礫が多数検出された。遺物は1~3のほか陶磁器片、陶器片が若干出土した。建物の地形と考えられる

土坑2 (図版2) (図版8-4~6)

長軸5.2m、短軸3.7m、検出面からの深さは40cmで平面形は不整な長方形を呈する。長さ10~20cm大の角礫が多数検出された。遺物は4~6の陶器のほか、陶磁器片、陶器片が若干出土した。地形もしくは流し場と考えられる。

井戸1 (図版2)

土坑1の北端に位置する。平面形は長径80cm、短径70cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは1mを測るが、崩落の危険があるため底部までの検出を断念した。

土坑3 (図版2)

長軸2.7m、短軸1.3m、検出面からの深さ50cmで平面形は不整な隅丸方形を呈する。遺物は微細な陶器片と土師質土器片が出土した。

土坑4 (図版3)

長軸3.03m、短軸1.23m、検出面からの深さ36cmで、土坑2・3に切られるが平面形は長方形と考えられる。遺物は陶器、磁器、土師質土器の細片が出土した。

土坑6 (図版3)

長軸2.5m、短軸1.69m、検出面からの深さ18cmで、平面形は隅丸方形を呈する。遺物は検出されなかった。

土坑7 (図版3)

長軸1.18m、短軸0.76m、検出面からの深さ34cmで平面形は不整な楕円形を呈する。遺物は検出されなかった。

土坑9 (図版3)

長軸1.08m、短軸0.92m、検出面からの深さ13cmで平面形は楕円形を呈する。陶器と磁器の細片が出土した。

土坑10 (図版3)

長軸1.65m、短軸1.58m、検出面からの深さ10cmで平面形は隅丸方形を呈する。遺物は検出されなかった。

土坑11 (図版3)

径58cm、検出面からの深さ8cmで平面形は円形を呈する。遺物は検出されなかった。

土坑12 (図版3)

径1.12m、深さ13cmで平面形は円形を呈する。遺物は検出されなかった。

土坑13 (図版3)

長軸1.45m、短軸1.03m、検出面からの深さ8cmで平面形は楕円形を呈する。遺物は磁器の細片が出土した。

土坑14 (図版4)

長軸1.34m、短軸0.88m、検出面からの深さ29cmで平面形は楕円形を呈する。遺物は瓦と陶器の細片が出土した。

土坑15 (図版4) (図版9-7)

径1.12m、検出面からの深さ約62cmの円形の土坑に黄灰色漆喰を貼り桶を据え付けた埋桶の構造を呈する。遺物7のほか磁器細片が出土した。

土坑16 (図版4)

長軸2.13m、短軸1.1m、深さ約18cmで平面形は楕円形を呈する。遺物は検出されなかった。

土坑19 (図版4)

径約1.18m、深さ約57cmで平面形は不整な円形を呈する。遺物は瓦と磁器の細片が出土した。

土坑20 (図版4)

長軸1.54m、短軸1.36m、検出面からの深さ43cmで平面形は楕円形を呈する。遺物は瓦の細片が出土した。

土坑21 (図版4)

長軸1.53m以上、短軸1.32m、検出面からの深さ21cmで平面形は長方形を呈する。遺物は瓦、陶器、磁器の細片が出土した。

溝2 (図版4) (図版9-11~図版10-17)

幅0.87m、長さ2.7m、検出面からの深さは10cmで断面形は皿形を呈する。遺物は11~16の瓦、17の陶器鉢などが出土した。建物に付随する雨落溝と考えられる。

溝1 (図版5) (図版9-8~10)

幅1.2m、長さ14m、断面形は逆台形を呈する。遺物は8~10の瓦の他、磁器の細片が出土した。防湿のための溝と考えられる。

土坑22 (図版5) (図版10-18~20)

長軸2.92m、短軸2.0m検出面からの深さ約18cmで平面形は隅丸方形を呈する。表面付近からは多数の角礫が検出された。遺物は18~20の他、瓦、陶器、磁器の細片が出土した。

土坑23 (図版5) (図版10-21~23)

長軸2.7m、短軸2m、検出面からの深さ約16cmで平面形は不整な長方形を呈し、断面形は逆台形を呈する。遺物は21~23の陶器が出土した。

土坑24 (図版5) (図版11-24)

一辺約4.5m程度、検出面からの深さ約16cmで平面形は方形を呈すると考えられる。長さ10~20cm程度の角礫が多量に検出され、遺物は24の陶器以外に磁器の細片が出土した。建物の地形と考えられる。

土坑25 (図版5) (図版11-25~26)

長軸4.36m、短軸2.7m、深さ16cmで平面形は瓢箪形を呈する。25、26の遺物の他、陶器、磁器の細片が出土した。

土坑26 (図版5) (図版11-27~29)

平面形は長軸4.1m、短軸約3.4mの方形を呈するものと考えられ、中央部付近に、径約76cm、深さ約50cmの円形の掘りこみを持つ。遺物は27~29の陶器、磁器の他、陶器、磁器、土師質土器の細片が出土した。

土坑27 (図版6)

平面形は径約80cmの円形を呈し、検出面からの深さは8cmで角礫が多量に検出された。

土坑28 (図版6)

長軸0.94m、短軸0.64m、検出面からの深さ20cmで平面形は不整な長方形を呈する。遺物は検出されなかった。

土坑29 (図版6) (図版11-30~31)

平面形は径約80cmの円形で、検出面からの深さは23cmを計る。遺物は30の瓦31の軽石の他、陶器の細片が出土した。

池泉状遺構 (図版6)

長軸78cm、短軸58cmの平坦な石の周囲を東西約2m、南北約1.5mにわたり黄灰色漆喰で固め、縁辺部を盛り上げた池状の構造を呈する。

土坑30 (図版6)

長軸75cm、短軸45cm、検出面からの深さ17cmで平面形は長方形を呈する。

土坑31 (図版6) (図版11-32~33)

長軸1.07m、短軸0.72m、検出面からの深さ約26cmで平面形は楕円形を呈する。遺物は陶器碗、土製品の他、陶器細片が出土した。

土坑32 (図版6) (図版11-34~35)

長軸1.28m、短軸0.87m、検出面からの深さ約8cmで平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈

する。遺物は34の磁器、35の陶器が出土した。

溝3 (図版6)

幅約30cm、長さ2.75mの石組み溝である。両端が削平されており規模は不明である。排水溝と考えられる。

土坑33 (図版7) (図版11-36~図版12-40)

長軸1.6m以上、短軸0.98m、検出面からの深さ約16cmで平面形は楕円形を呈するものと考えられる。

土坑34 (図版7) (図版12-41)

径約1.4m、検出面からの深さ約92cmの円形坑に黄灰色漆喰を貼った土坑で、下方に桶の痕跡が残る。遺物は41の磁器が出土した。

土坑35 (図版7)

長軸0.86m、短軸0.58m、検出面からの深さ約12cmで平面形は楕円形を呈する。

土坑36 (図版7) (図版12-42~図版17-104)

長軸5.04m、短軸約2.8m、検出面からの深さ約18cmで平面形は瓢箪形を呈する。遺物は42~104の大量の陶器、磁器、瓦が出土した。

石列1 (図版7)

土坑36に接し、長さ約7.2mにわたり長さ20cmから90cm程度の角礫で構築される。

遺物

今回の調査で出土した遺物は、施釉陶器、無釉陶器、磁器、土師質土器などの陶磁器類や瓦の他、若干量の金属器が出土している。無釉陶器は、備前焼の鉢や播鉢、灯明皿のほか明石系の播鉢などがある。施釉陶器では、肥前系の鉢、京焼、京・信楽系の碗、皿類のほか瀬戸・美濃系の製品も出土しているが生産地不明のものが大半を占める。磁器は圧倒的に肥前産のものが多数を占めるが、少量ながら瀬戸・美濃産の碗などが出土している。器種は碗、鉢、皿、瓶、播鉢、灯明具、土瓶、などが主体である。また、出土した磁器のうちには、焼継ぎの施されたものも多数認められる。

無釉陶器5の播鉢は備前焼と考えられるが、これ以外では20と94の播鉢は明石系と考えられる。施釉陶器では50・51・52は京・信楽のいわゆる関西系と称される碗である。2・22・29の鉢や27の陶胎染付の碗は肥前産である。また施釉陶器42は高台内に刻印を持つ19世紀代の京焼である。

瓦は軒丸瓦は全て巴文であり、軒平瓦は唐草文である。瓦のうち「大」字の陽刻をもつ軒丸瓦と軒平瓦は足守産の製品である可能性が指摘されている⁽¹⁾⁽²⁾。

今回の調査で出土した遺物は瓦と陶器の一部に17世紀代から18世紀前半代までさかのぼるものが認められるほかは、大半が18世紀後半から19世紀代にかけてのものである。

(1) 草原孝典『足守藩武家屋敷跡』岡山市教育委員会 1995年

(2) 乗岡 実「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世寺社建築』岡山市教育委員会 1996年

出土遺物観察表

土坑1

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
8	1	染付磁器碗	(9.8)	5.4	外面：体部桐文 高台内圈線 銘	肥前
	2	施釉陶器鉢	—	—	外面：高台部露胎 釉色：10Y7/1 胎土：7.5Y8/1	肥前系
	3	青磁瓶	—	—	高台端部鉄錆 外面：青磁釉 内面：露胎	肥前

土坑2

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
8	4	施釉陶器灯明具	5.2	3.7	高台部露胎 色調：7.5Y7/1	
	5	無釉陶器摺鉢	(40.0)	17.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ 卸目9本1単位 胎土：10R5/8	備前
	6	無釉陶器鉢	(35.0)	20.5	内外面回転ナデ 外面：鉄泥漿塗 胎土：7.5YR7/2	備前

土坑15

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
9	7	染付磁器皿	(19.0)	2.4	外面：体部唐草 高台端部釉剥ぎ 内面：斑馬・松	肥前

溝1

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
9	8	軒丸瓦	—	—	左巴文 「大」字	
	9	軒丸瓦	3.2	1.3	唐草	
	10	軒丸瓦	3.0	1.3	唐草	

溝2

図版	番号	種別	径	厚さ	整形・調整技法の特徴・文様	備考
9	11	軒丸瓦	13.5	2.1	左巴文	
	12	軒丸瓦	(12.7)	1.5	左巴文	
10	13	軒丸瓦	2.5	1.2	「大」字、唐草	
	14	軒丸瓦	3.3	1.1	宝珠、唐草	
	15	軒丸瓦	3.5	1.6	宝珠、唐草	
	16	軒丸瓦	3.5	1.8	唐草	
図版	番号	種別	口径	厚さ	整形・調整技法の特徴・文様	備考
10	17	施釉陶器鉢	12.1	6.9	外面：体部下半、高台部露胎 釉色：5Y8/2 胎土：2.5Y8/1	

土坑22

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
10	18	白磁碗	(8.0)	4.1	外面：高台端部露胎	
	19	土師質壺(焼塩壺)	5.4	8.9	外面：ナデ、刻印 内面：布目 色調：5YR7/6	
	20	無釉陶器摺鉢	—	—	外面：口縁部ナデ 色調：2.5YR4/4	明石系

土坑23

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
10	21	施釉陶器碗	8.2	6.2	高台部露胎 外面：体部印判 色調：5Y8/1	
	22	施釉陶器碗	24.0	11.5	高台部露胎 外面・内面：刷毛目	肥前
	23	無釉陶器鉢	(32.4)	10.3	外面・内面：ヨコナデ	備前

土坑24

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
11	24	施釉陶器碗	—	—	外面：高台端部砂付着 内面：見込み砂目 釉色：2.5G Y7/1 胎土：N7/0	肥前

土坑25

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
11	25	無釉陶器皿	8.0	4.2	外面：回転ヘラケズリ 内面：ナデ 色調：2.5YR5/6	備前
図版	番号	種別	全長	径	整形・調整技法の特徴・文様	備考
11	26	金属器(銅製品)	14.8	0.4	断面六角形	

土坑26

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
11	27	施釉陶器碗	(10.4)	6.6	高台端部鉄釉 胎土：10Y6/1 陶胎染付	肥前
	28	染付磁器碗	—	—	外面：高台端部露胎 体部 銀杏文	
	29	施釉陶器鉢	—	—	外面：高台内露胎 内面：刷毛目 色調：7.5YR6/4	肥前

土坑29

図版	番号	種別	口径	厚さ	整形・調整技法の特徴・文様	備考	
11	30	軒平瓦	2.1	2.0	宝珠、唐草		
図版	番号	種別	長さ	幅	厚さ	整形・調整技法の特徴・文様	備考
11	31	石製品(軽石)	8.3	5.4	3.0		

土坑31

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
11	32	施釉陶器碗	—	—	高台部露胎 色調:5Y8/2	
	33	土製品(人形)	—	—	型合わせ 彩色	犬を抱く人

土坑32

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
11	34	染付磁器壺	—	—	外面:蛸唐草	
	35	施釉陶器灯明皿	(11.8)	2.7	外面:体部下位、底部露胎	

土坑33

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
11	36	染付磁器皿	—	—	外面:高台端部露胎 体部唐草文 内面:枝花	肥前
	37	染付磁器蓋	(9.0)	2.8	外面:つまみ端部露胎 体部 扇・草花 内面:口縁部 雷文	
図版	番号	種別	径	厚さ	整形・調整技法の特徴・文様	備考
12	38	軒丸瓦	12.7	2.0	左巴文	
	39	軒丸瓦	12.3	1.9	左巴文	
	40	軒丸瓦	13.0	1.5	左巴文	

土坑34

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
12	41	染付磁器蓋	(13.9)	4.9	受け口部露胎 外面:体部唐草	

土坑36

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
12	42	施釉陶器向付	11.6	5.9	高台端部露胎、底部七角形、刻印「清」 内・外面:体部 紅葉文 葡萄文型押し 色調:2.5Y8/2	京焼
	43	染付磁器瓶	—	—	高台部露胎、外面:体部竹・梅 内面:露胎	肥前
	44	染付磁器瓶	—	—	外面:頸部蛸唐草、体部草花・回線 内面:露胎	肥前
	45	施釉陶器德利	3.7	—	外面:緑釉 内面:露胎	
	46	白磁瓶	—	—	外面:高台端部露胎 内面:露胎 釉色:透明 胎土:N8/	肥前
	47	白磁香炉	9.2	4.7	外面:底部露胎、内面:口縁部釉剥ぎ 釉色:10GY8/1 胎土:N8/	肥前
	48	施釉陶器碗	7.0	4.9	外面:底部露胎 釉色:10YR6/6 胎土:10YR7/3	
	49	施釉陶器碗	6.6	4.9	外面:高台部露胎 釉色:10YR/6/6 胎土:10YR8/4	
13	50	施釉陶器碗	8.8	5.1	外面:高台部露胎 釉色:透明 色調:5Y8/2	信楽系
	51	施釉陶器碗	8.7	4.6	外面:高台部露胎 釉色:透明 色調:2.5Y7/1	信楽系

13	52	施釉陶器碗	8.4	4.6	外面:高台部露胎 釉色:透明 色調:10GY7/1	信楽系
	53	染付磁器碗	7.4	3.6	外面:渦巻文 内面:回線 釉色:透明 胎土:N8/	瀬戸・美濃系
	54	染付磁器碗	(9.0)	—	外面:蛸唐草・連弁 内面:口縁 四方襷	
	55	染付磁器碗	(9.8)	5.3	外面:竹 内面:回線	肥前
	56	染付磁器碗	10.4	5.9	外面:体部竹・雀 高台内銘 内面:体部竹 見込内雀	肥前
	57	染付磁器碗	7.5	4.6	内面:口縁部回線 見込内 花卉	肥前
	58	染付磁器碗	7.5	6.4	外面:回線 内面:回線	焼継ぎ
	59	染付磁器碗	9.4	4.8	外面:梅・丸十文 内面:回線	焼継ぎ 肥前
	60	染付磁器碗	9.4	5.4	外面:雨・七宝繫ぎ 内面:口縁雷文	肥前系
	61	施釉陶器碗	10.5	6.5	外面:体部ヘラケズリ 松	
	62	染付磁器碗	10.8	6.0	外面:植物 内面:見込内「寿」	
	63	染付磁器小杯	5.4	2.7	外面:高台端部露胎 体部回線 内面:口縁部釉ハギ	肥前
	64	染付磁器	6.7	3.6	外面:体部 唐草	肥前
	65	染付磁器碗	6.7	6.1	高台端部露胎 外面:体部 唐草	肥前
	66	施釉陶器碗	6.5	3.9	外面:文字(鉄釉) 内面:施釉 釉色:5Y8/1	
	67	染付磁器碗	(8.2)	4.6	高台端部露胎 外面:体部赤絵文字(10R4/8)	
	68	染付磁器碗	(7.6)	7.5	高台端部露胎 外面:体部風景・文字 高台内銘 内面:口縁部雷文 胎土:N8/	肥前
	69	染付磁器碗	10.7	6.0	高台端部露胎 外面:体部 橋・人物・東屋 内面:口縁 部雷文 見込み内 橋・人物	焼継ぎ 肥前
	14	70	染付磁器	(9.6)	6.3	高台端部露胎 外面:回線・桐 内面:体部下位露胎
71		染付磁器段重	11.2	5.5	口縁端部・高台端部露胎	
72		染付磁器段重	14.8	6.2	口縁端部・体部下位露胎 外面:口縁 紗綾形・丸	
73		染付磁器段重	17.2	7.4	高台端部露胎	肥前
74		色絵磁器段重	7.4	—	口縁端部・高台端部露胎	焼継ぎ 肥前
75		染付磁器輪花鉢	9.4	6.3	高台端部露胎 外面:窓 渦・宝珠・羽 体部下位 連弁	肥前
76		染付磁器鉢	10.4	6.6	高台端部露胎 外面:山水 内面:見込み内 山水	肥前
77		青磁染付鉢	(15.2)	6.2	高台端部露胎	
78		染付磁器鉢	12.6	7.0	外面:唐草 内面:鳥・梅・窓	焼継ぎ 肥前
15	79	染付磁器蓋	8.4	2.6	つまみ端部露胎 外面:青海波・鳥 内面:口縁雷文	焼継ぎ 肥前
	80	染付磁器蓋	9.0	2.5	つまみ端部露胎 外面: 内面:口縁雷文 見込み 花	焼継ぎ 肥前
	81	染付磁器蓋	9.1	2.8	つまみ端部露胎 外面:草花・丸 内面:口縁雷文	肥前
	82	染付磁器蓋	9.7	2.9	つまみ端部露胎 外面:蝶・草花・欄干 内面:見込み 鳥	肥前
	83	染付磁器蓋	9.1	2.6	つまみ端部露胎 外面:外面:枝花・鳥	肥前
	84	染付磁器蓋	9.5	3.0	つまみ端部露胎 外面:窓 建物・橋・人物	肥前
	85	染付磁器輪花皿	10.7	2.8	外面:波・雲 内面:波・龍	焼継ぎ 肥前
	86	染付磁器輪花皿	8.4	2.7	内面:扇・蔓草 高台端部露胎	

15	87	染付磁器輪花皿	8.8	2.9	内面:扇・本・羽 高台端部露胎	
16	88	施釉陶器蓋	10.2	3.1	つまみ貼り付け 外面:灰釉・白泥漿描き 内面:露胎 色調:5Y6/2	
	89	施釉陶器土瓶	11.0	—	耳・注口部貼り付け、外面:体部鉄絵・白泥漿描き 体部 下位露胎 内面:口縁部以下露胎 釉色:2.5Y7/1 胎土2.5Y8/2	
	90	施釉陶器鍋	20.2	8.0	外面:体部下半露胎 内面:灰釉 釉色:5Y7/2	信楽系
	91	施釉陶器鉢	(22.4)	6.1	外面:高台部露胎 高台内墨書 釉色:7.5YR5/6 胎土:10YR8/4	
	92	施釉陶器香炉	11.0	6.8	外面:高台部露胎、口縁端部釉ハギ 釉色:濃緑色 胎土:2.5Y8/2	
	93	土師質七厘	19.8	19.5	外面:丹塗り10R4/8 内面:タテハケ 胎土:7.5YR7/3	
	94	無釉陶器摺鉢	—	—	外面:体部下位回転ナデ 内面:卸目 色調:10R6/8	明石系
	95	無釉陶器灯明皿	7.0	1.0	回転糸切り、ナデ	備前
	96	無釉陶器灯明皿	6.4	1.0	回転糸切り、ナデ	備前
	97	施釉陶器灯明皿	(11.0)	1.6	外面:体部～底部露胎 回転ヘラケズリ	
98	施釉陶器杯	(9.0)	1.9	外面:体部～底部露胎 回転ヘラケズリ		
図版	番号	種別	径	厚さ	整形・調整技法の特徴・文様	備考
17	99	軒丸瓦	12.9	2.0	左巴文	
	100	軒丸瓦	13.5	1.9	左巴文	
	101	軒丸瓦	(13.0)	1.7	左巴文	
	102	軒丸瓦	(13.8)	(2.1)	左巴文	
	103	軒丸瓦	7.8	1.3	左巴文	
	104	軒丸瓦	3.4	1.2	「大」字、唐草	

遺構外出土遺物

図版	番号	種別	口径	器高	整形・調整技法の特徴・文様	備考
17	105	土師質土器釜	18.5	—	内面:ヨコハケ	
	106	無釉陶器摺鉢	—	—	内面:ヨコナデ 卸目 8本1単位 色調:5YR5/6	備前

第四章 ま と め

今回の調査は足守藩主の屋敷に付属する庭園、近水園の南側で足守川に面する場所に位置する武家屋敷に対する調査であり、昭和63年度の調査地にも近接しているため、良好な状態での建物跡等の検出が期待された。しかしながら、足守陣屋町のうち武家屋敷部分は明治以降大半が廃絶し農地に転用されたものが多く、今回の調査地では大きく削平を受けており明確な建物の痕跡を検出することはできなかつた。

以下、今回の調査についてまとめてみたい。

屋敷配置について

陣屋町の地割りについて詳細に記録されたものに、延宝7(1679)年から貞享3(1686)年に作成されたと推定される『陣屋町絵図』⁽¹⁾(図6)と七代藩主利潔の代である享保14(1729)年から元文5(1740)年以降に作成されたと推定される『足守町旧藩圖』⁽²⁾(図7)がある。今回の調査地は『陣屋町絵図』によれば田中次郎兵衛の屋敷に位置し『足守町旧藩圖』では宝永3(1705)年から6(1708)年ごろと推定される近水園の築造などにより屋敷割の一部に変更が見られるものの調査地の地割に変化は見られない。しかしながら、今回の調査では想定された屋敷区画の内側に調査範囲が限定されたため、屋敷区画の確認には至っていないが、現存する畑の畦の位置が屋敷地割にほぼ一致すると考えられる。

なお、足守陣屋町の成立や武家屋敷の配置については草原孝典氏による報告⁽³⁾ですでに明らかにされているが、その結果に今回の調査結果を重ね合わせたものが図8である。今回の調査では屋敷境を明らかにすることができなかつたが、今後の調査結果の集積を期待したい。

建物

体育館部分の調査においても陣屋形成期の遺構は確認されておらず、また『陣屋町絵図』では「明屋敷」となっていることから18世紀までは屋敷が建てられていなかった可能性が指摘されている。今回の調査においても、一部に17世紀代にさかのぼる遺物は出土しているものの建物の確認にはいたっていない。しかしながら当該地は『陣屋町絵図』では田中次郎兵衛の屋敷となっており当該期の建物が存在しなかつたとは考えられず、生活面が同一であったために明確な建物の痕跡が遺存しなかつた可能性が考えられる。

今回の調査では18世紀後半から19世紀代の建物については柱穴の一部や建物に伴う溝、地行と考えられる遺構が検出された。建物の配置については、家格に違いはあるものの現存する杉原家の例から推察して、主屋部分と、井戸が検出された周辺に風呂などの別棟等を持つ構造が想定される。しかしながら、現状では大きく削平を受けており建物の規模や構造については明確に判断し難い。

(1) 岡山大学教育学部社会科研究室『陣屋町の研究』1960年

(2) 永山卯三郎『吉備郡史』吉備郡教育会 1937年

(3) 草原孝典『足守藩武家屋敷跡』岡山市教育委員会 1995年

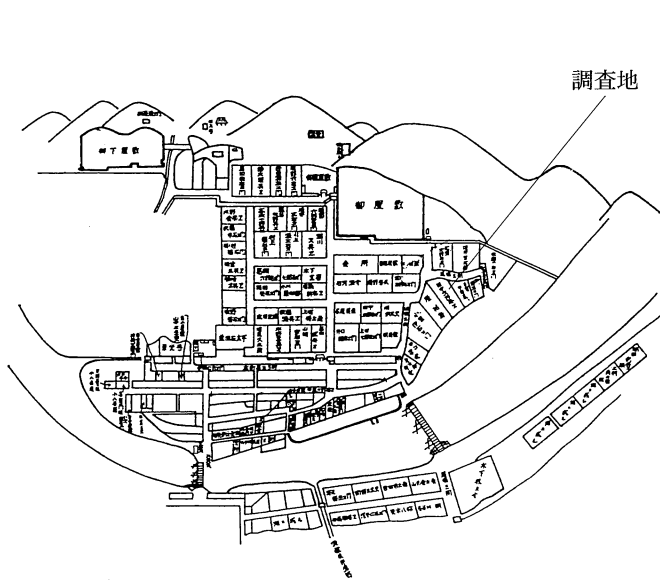


図6 陣屋町絵図

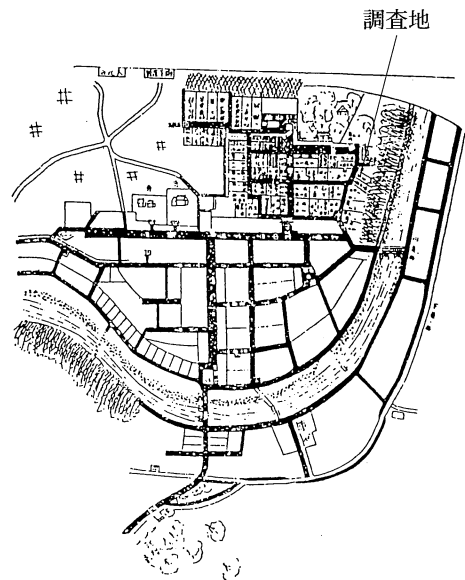


図7 足守町旧藩圖

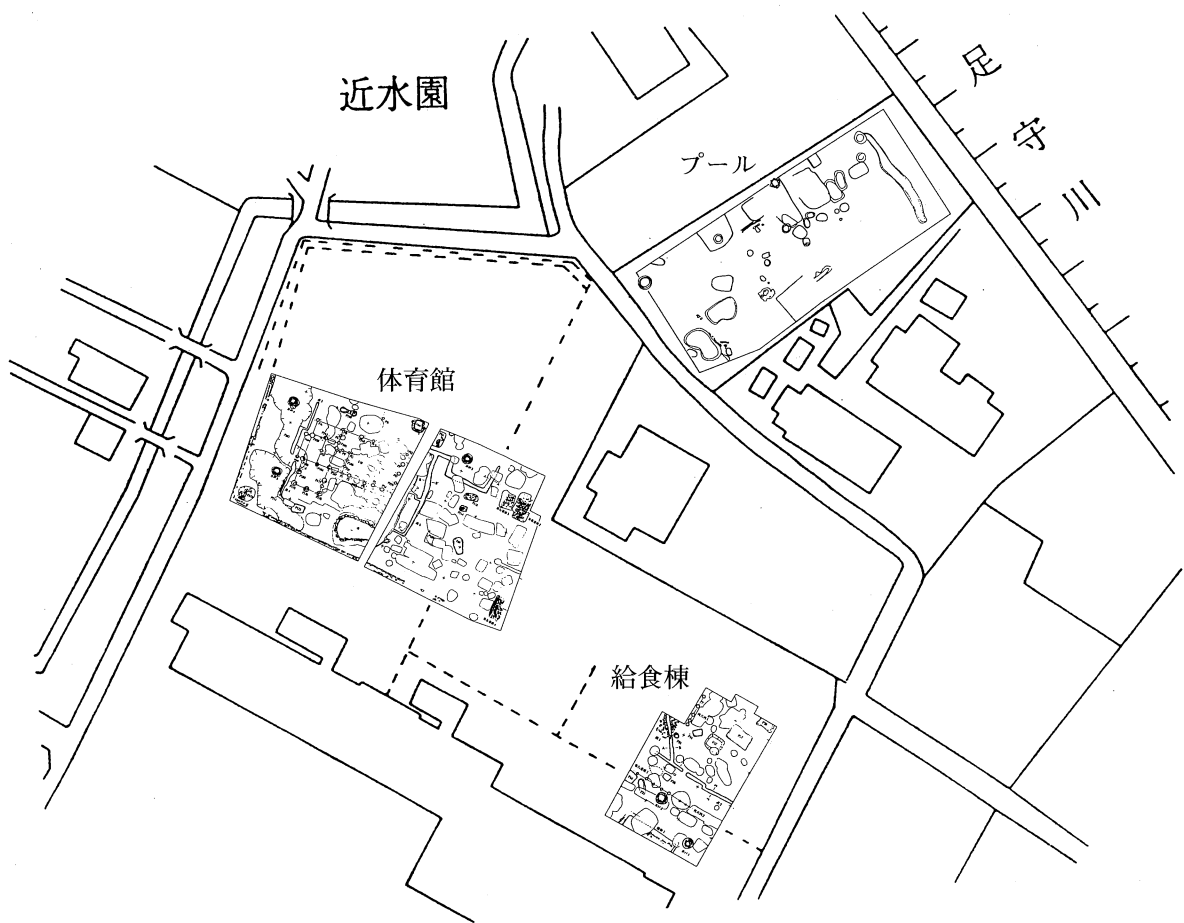
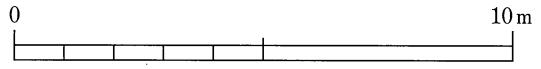
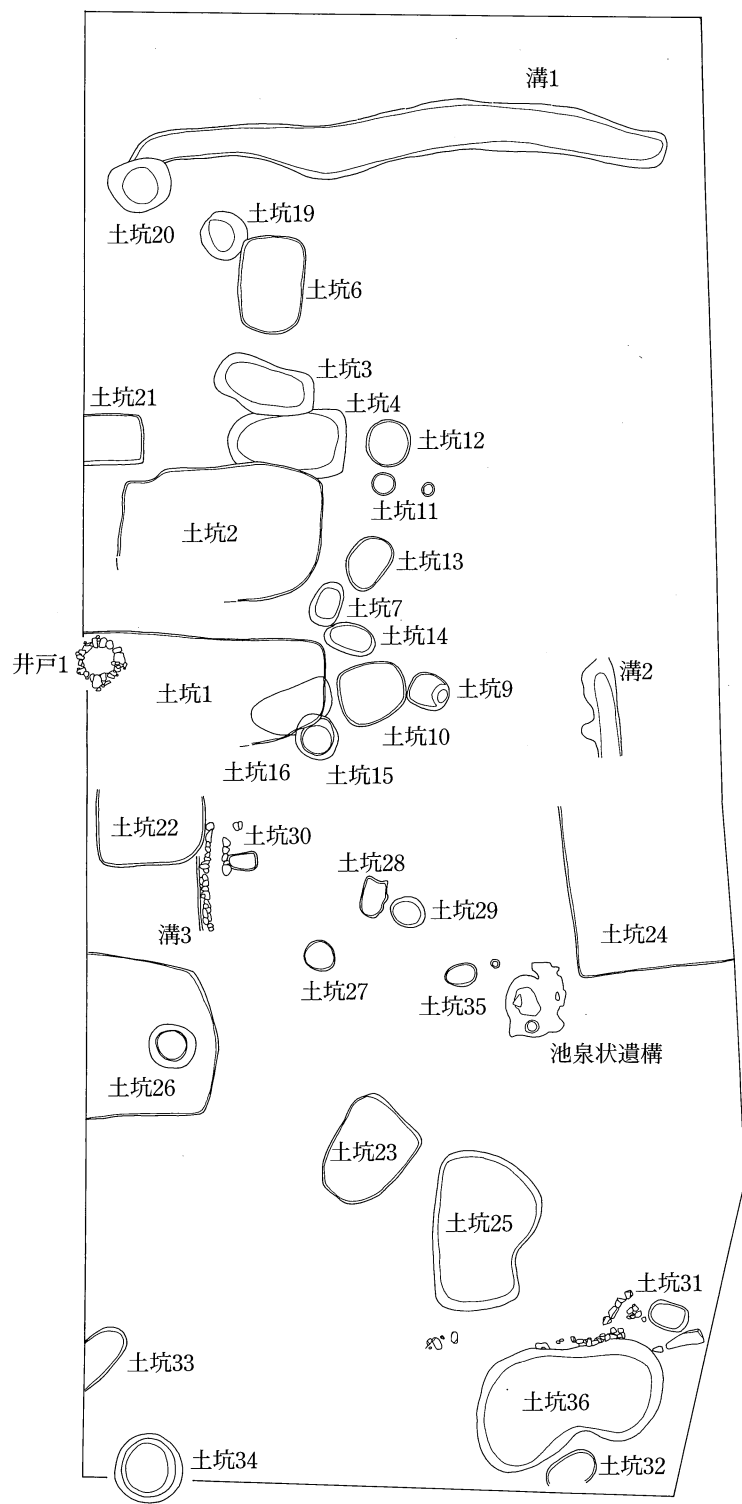
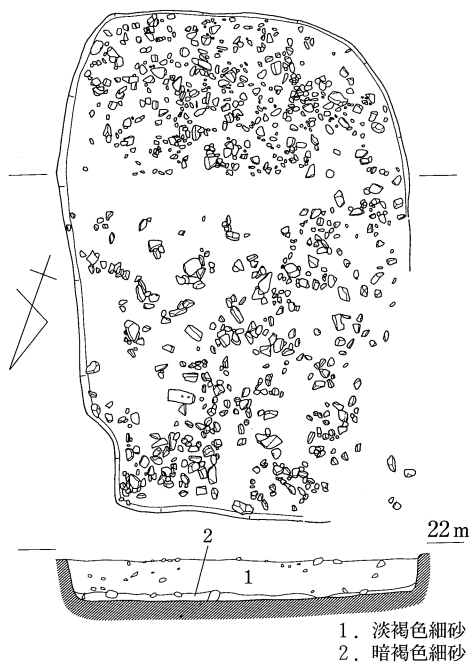


図8 屋敷地割推定図

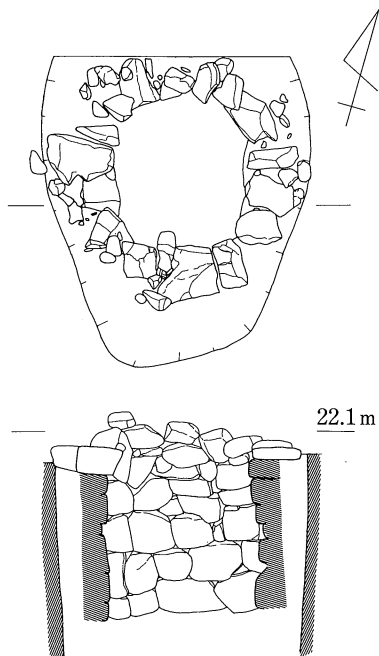
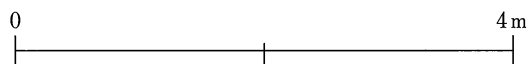




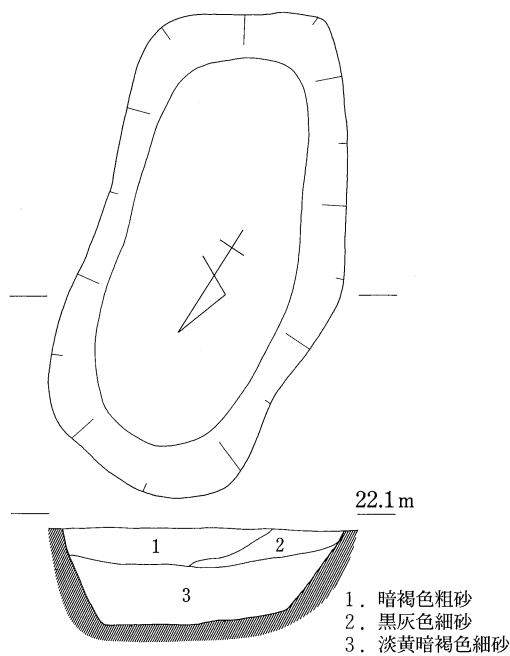
土坑1



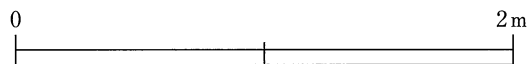
土坑2

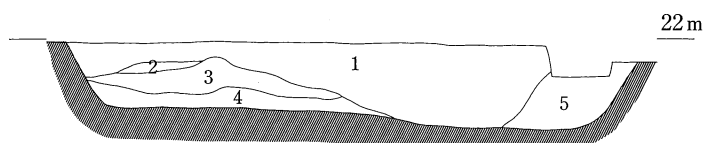
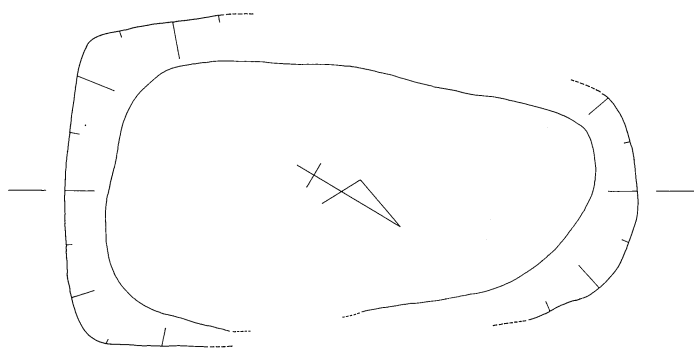


井戸1



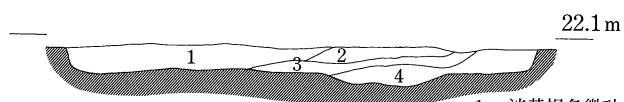
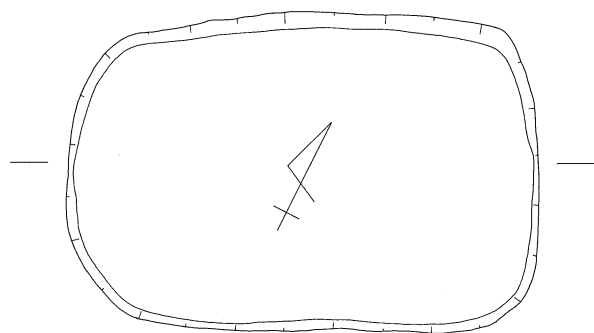
土坑3





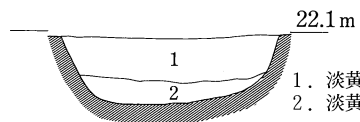
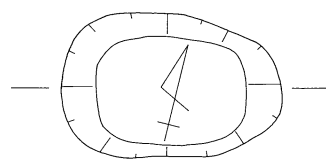
土坑4

- 1. 暗褐色細砂
- 2. 黄褐色細砂
- 3. 黑灰色細砂
- 4. 淡褐色細砂
- 5. 淡灰暗褐色細砂



土坑6

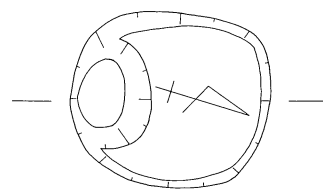
- 1. 淡黄褐色微砂
- 2. 淡灰褐色細砂
- 3. 暗灰色細砂
- 4. 暗褐色細砂



土坑7

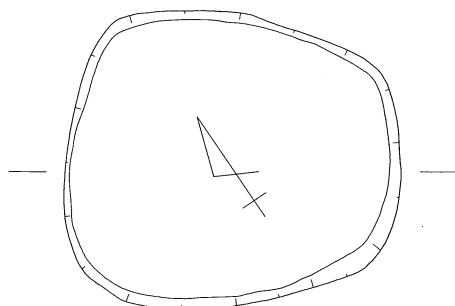
22.1m

- 1. 淡黄暗灰色細砂
- 2. 淡黄褐色細砂



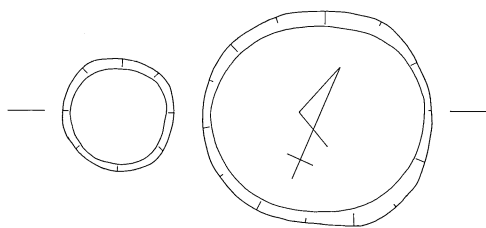
土坑9

22m



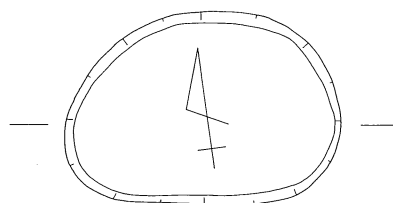
土坑10

22m



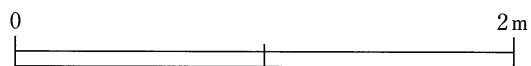
土坑11·土坑12

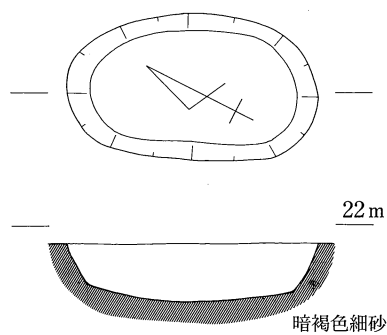
22m



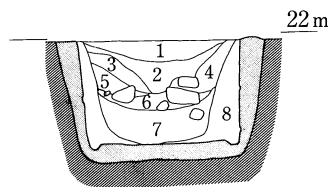
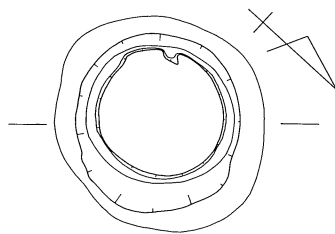
土坑13

22m



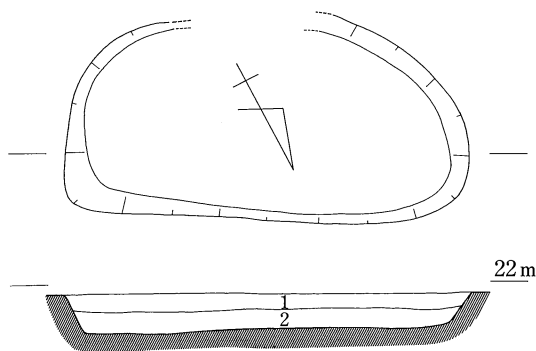


土坑14



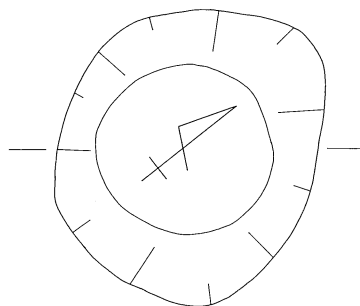
土坑15

1. 淡灰色細砂
2. 淡黃褐色粗砂
3. 淡褐色粗砂
4. 淡褐色粗砂
5. 淡灰色粗砂
6. 暗灰褐色粗砂
7. 淡褐色粗砂
8. 灰褐色粗砂

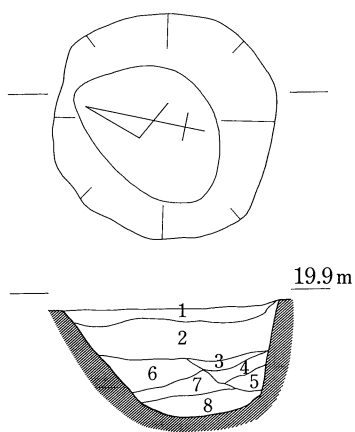


土坑16

1. 黑灰色細砂
2. 暗褐色細砂

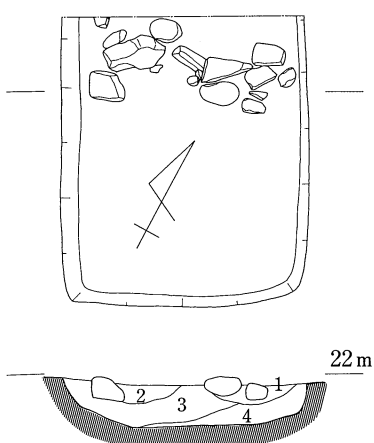


土坑20



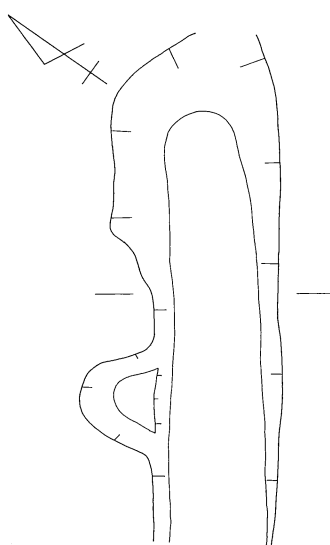
土坑19

1. 淡褐色粗砂
2. 暗褐色細砂
3. 淡灰色細砂
4. 暗灰色細砂
5. 淡褐色粗砂
6. 淡褐色粗砂 (炭多量)
7. 淡褐色粗砂
8. 暗褐色細砂

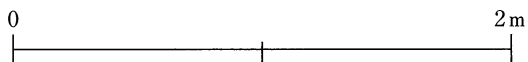


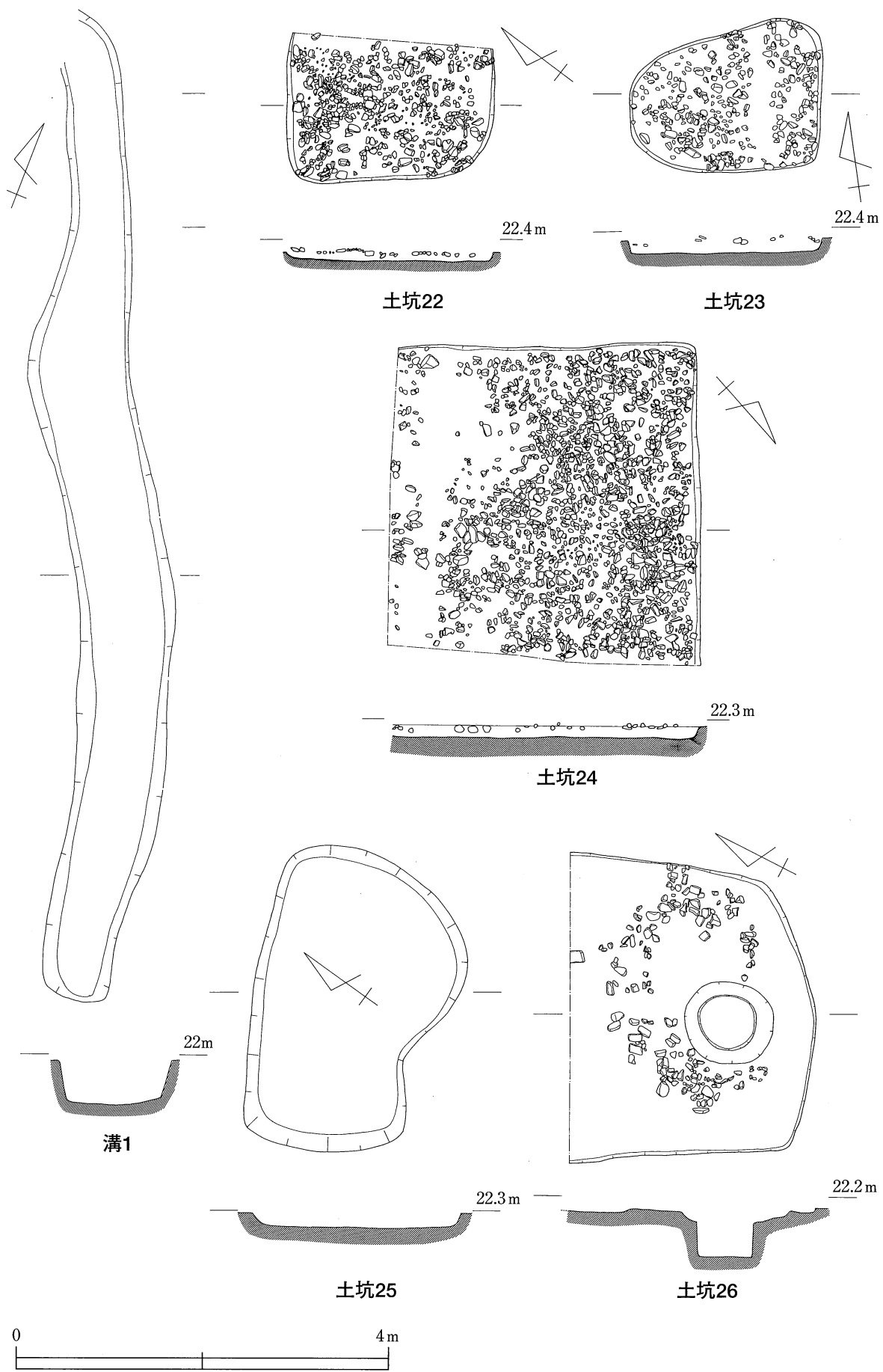
土坑21

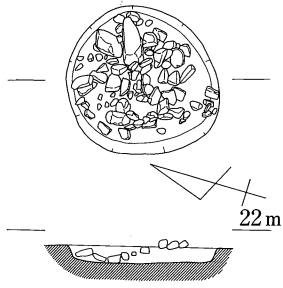
1. 淡褐色細砂
2. 黃白色粗砂
3. 黑灰色細砂
4. 淡灰色細砂



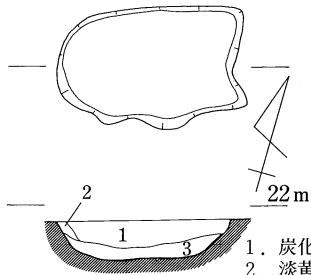
溝2





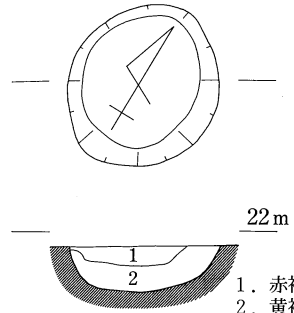


土坑27



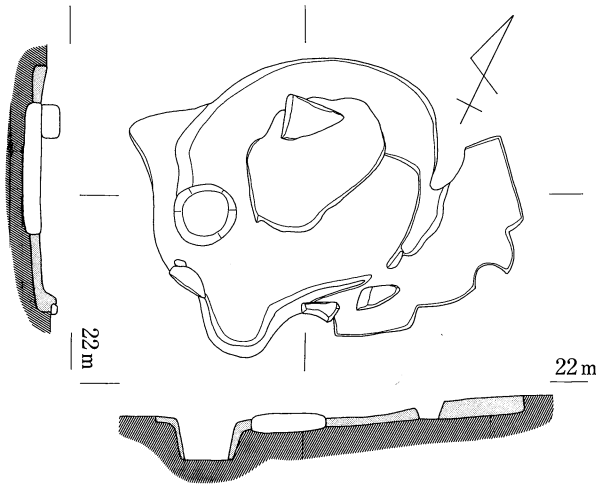
土坑28

- 1. 炭化層
- 2. 淡黃暗灰色細砂
- 3. 暗灰色細砂

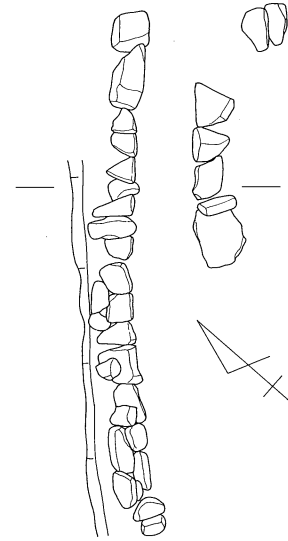


土坑29

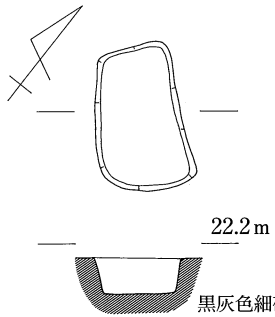
- 1. 赤褐色細砂
- 2. 黃褐色細砂



池泉狀遺構

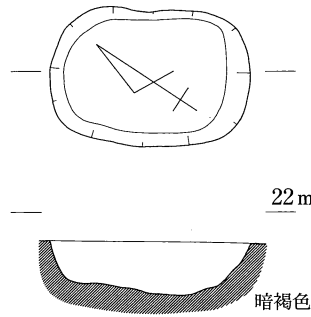


溝3



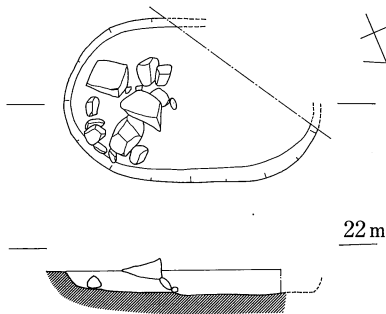
土坑30

黑灰色細砂

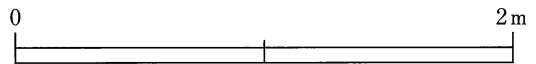


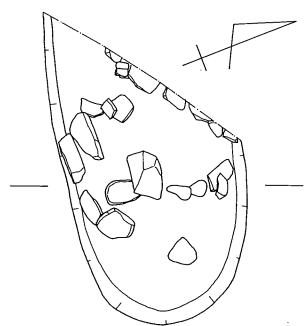
土坑31

暗褐色細砂



土坑32

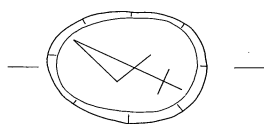




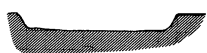
22m



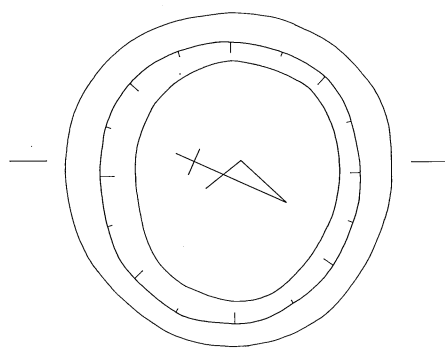
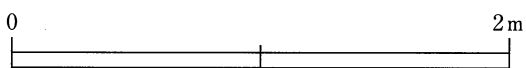
土坑33



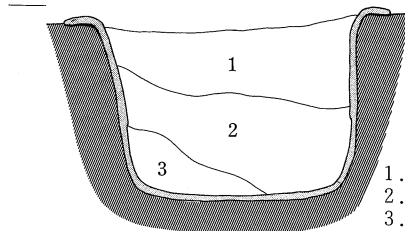
22m



土坑35

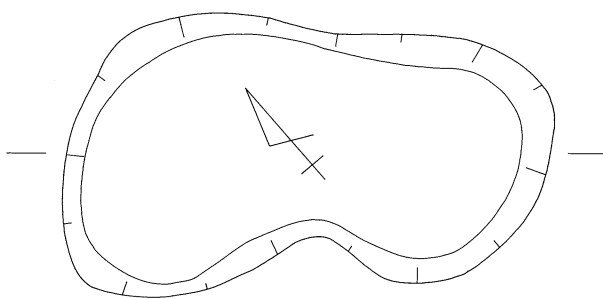


22.1m



- 1. 暗褐色細砂
- 2. 淡黄暗褐色細砂
- 3. 暗灰色細砂

土坑34



22.3m



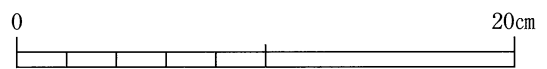
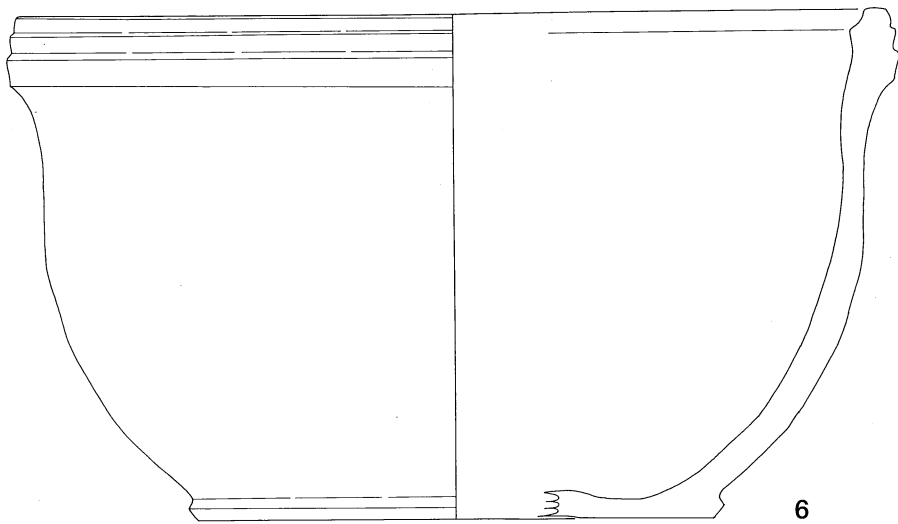
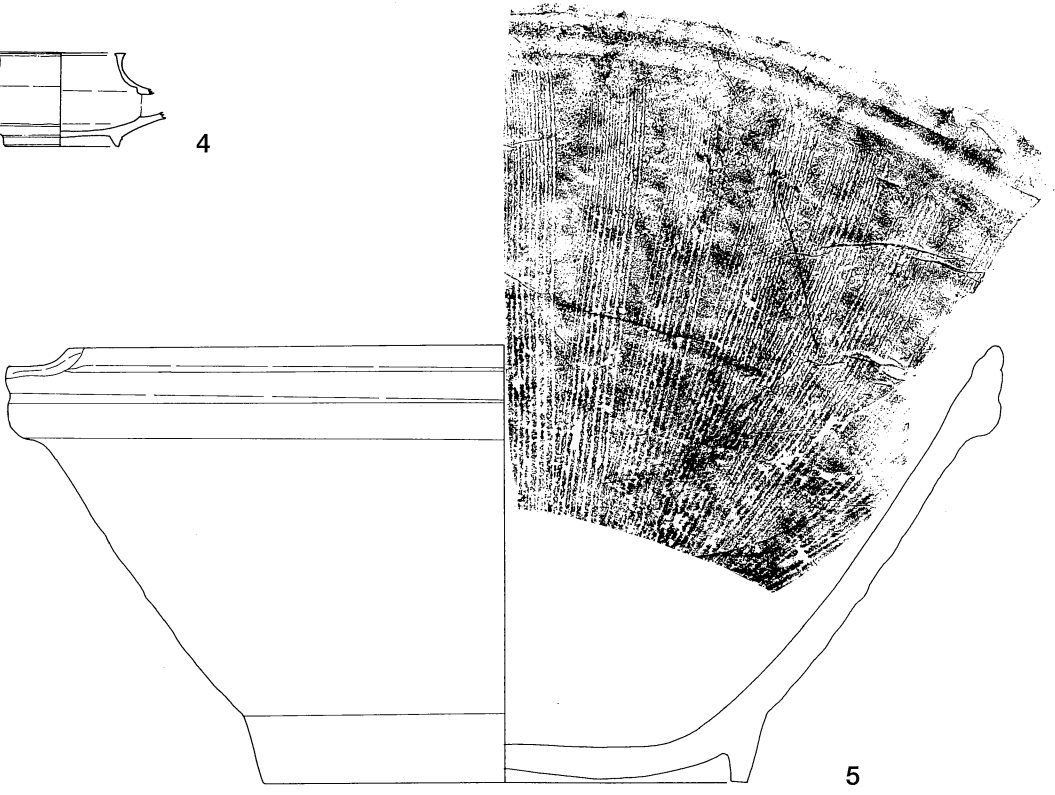
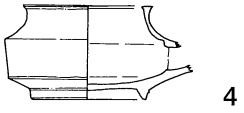
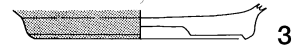
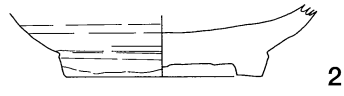
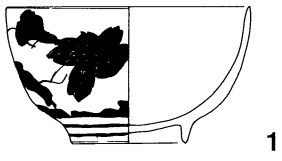
土坑36

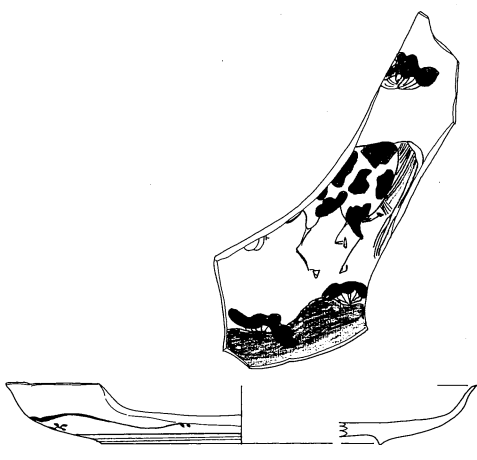


22m

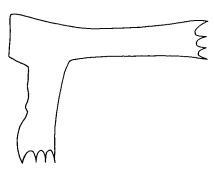
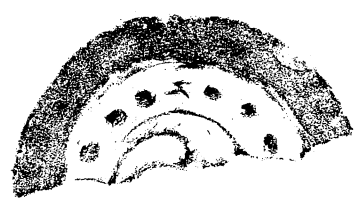


石列1





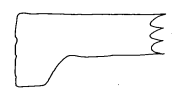
7



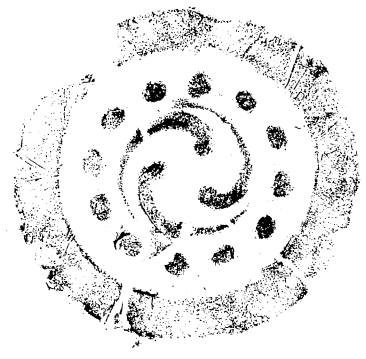
8



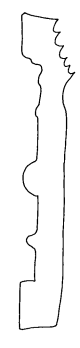
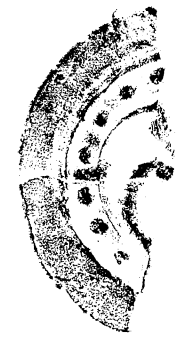
9



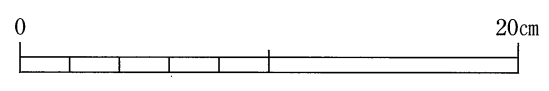
10

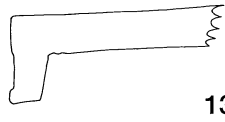


11

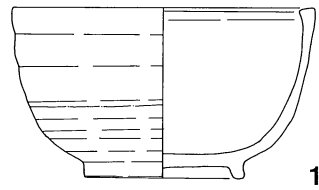


12

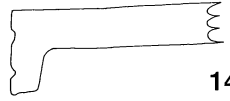




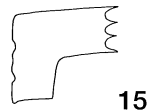
13



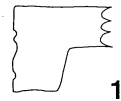
17



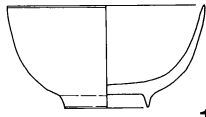
14



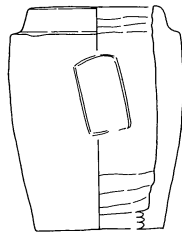
15



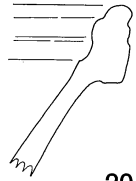
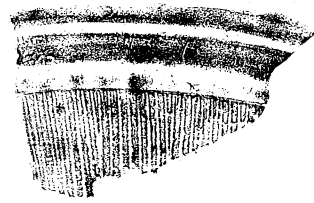
16



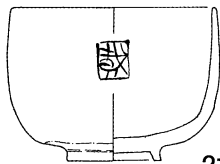
18



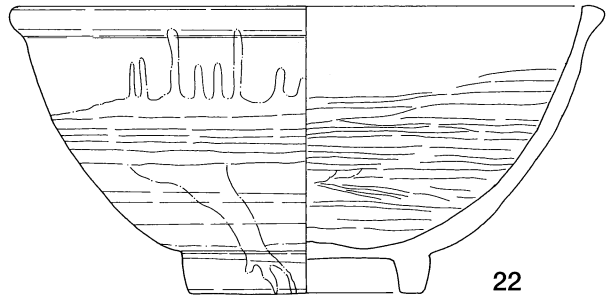
19



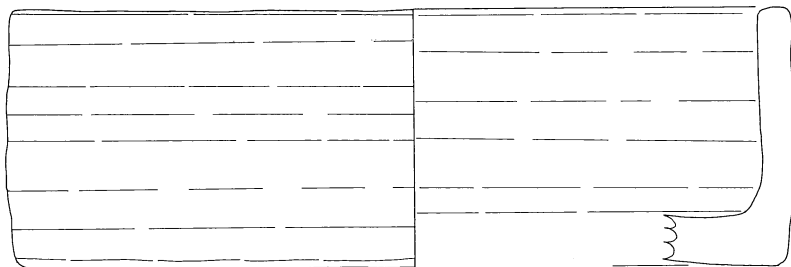
20



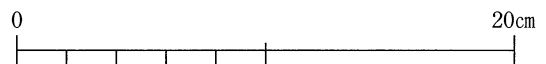
21

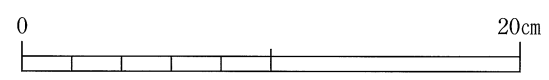
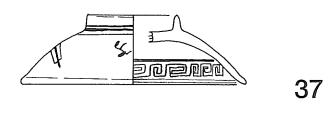
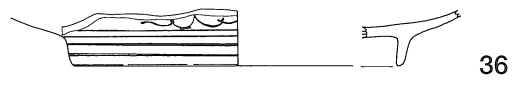
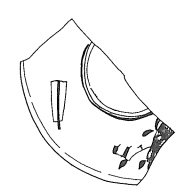
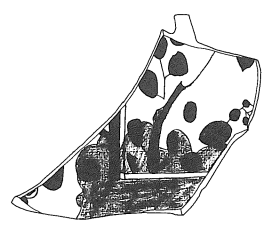
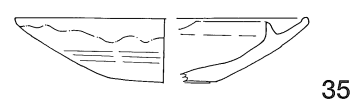
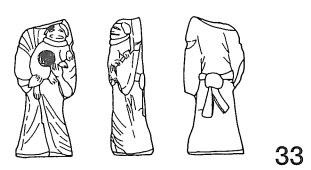
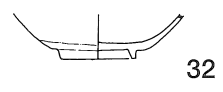
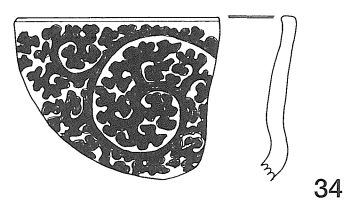
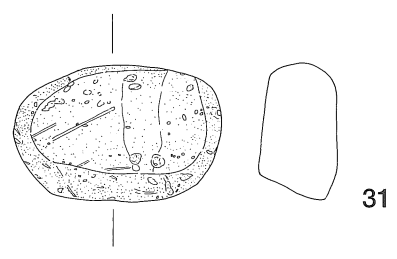
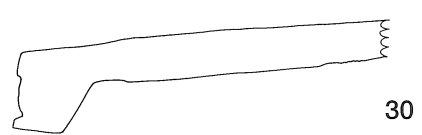
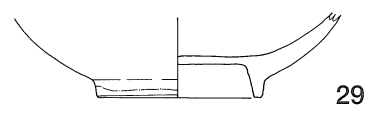
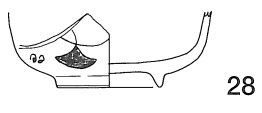
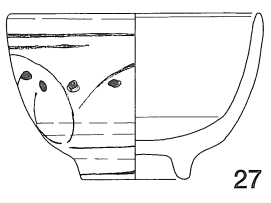
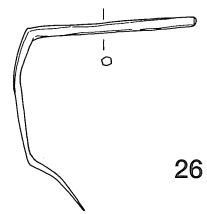
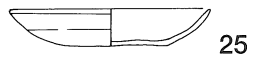
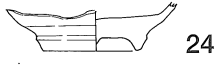


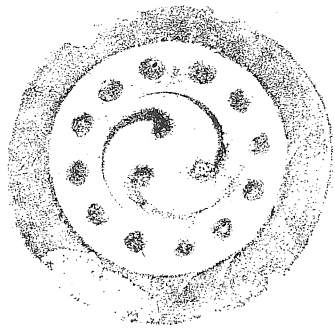
22



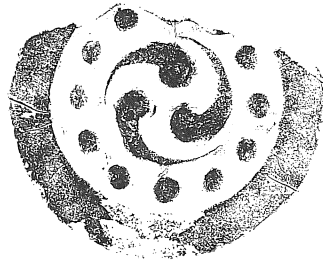
23



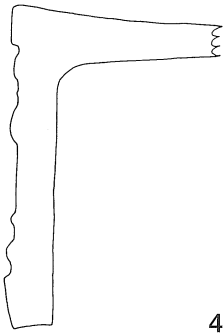
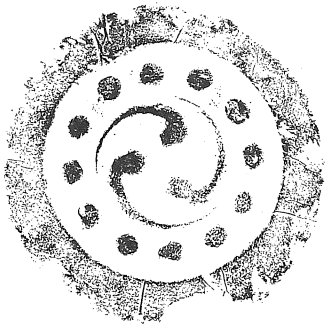




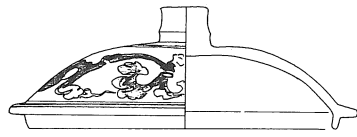
38



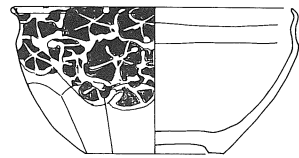
39



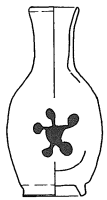
40



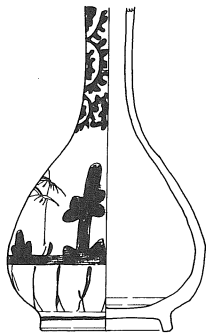
41



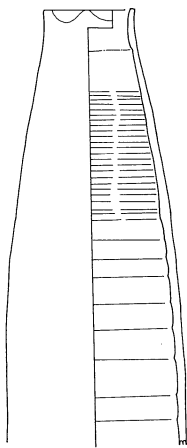
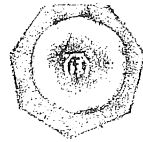
42



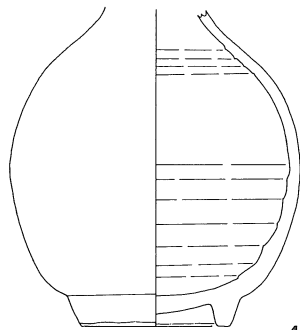
43



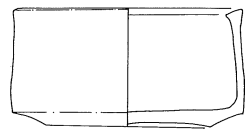
44



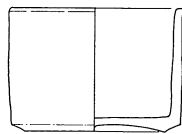
45



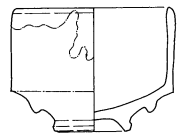
46



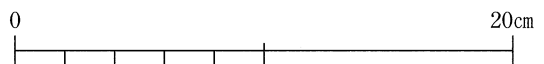
47

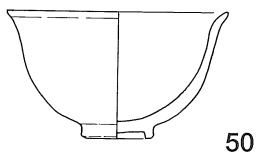


48

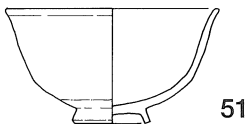


49

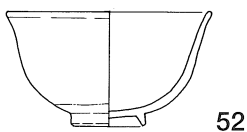




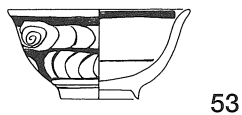
50



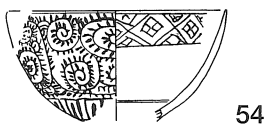
51



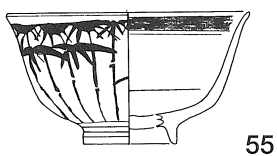
52



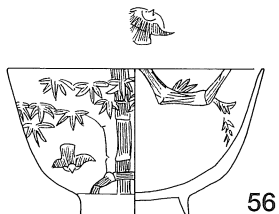
53



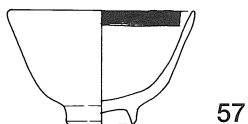
54



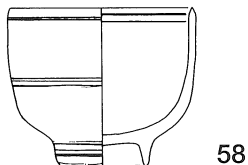
55



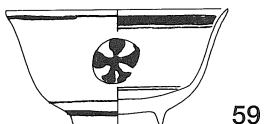
56



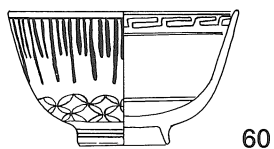
57



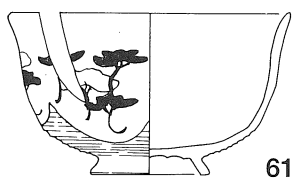
58



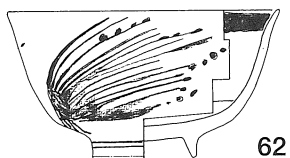
59



60



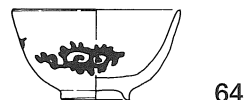
61



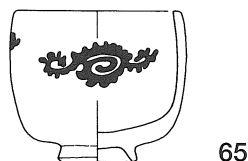
62



63



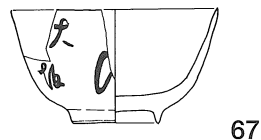
64



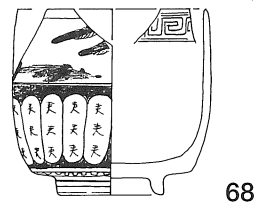
65



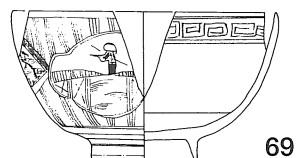
66



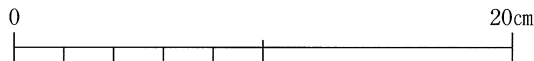
67

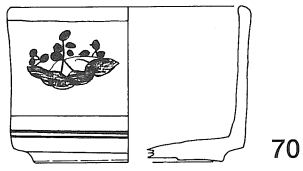


68

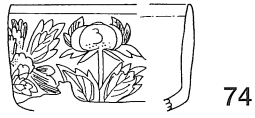


69

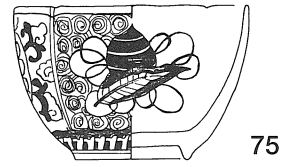




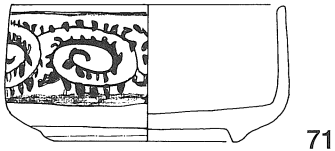
70



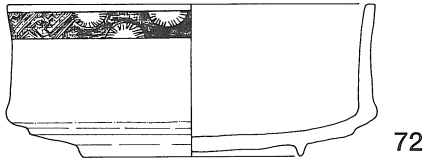
74



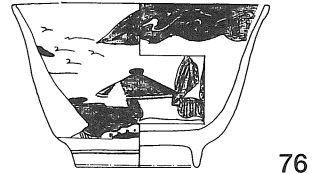
75



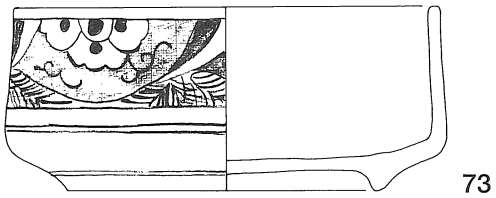
71



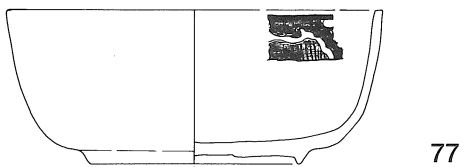
72



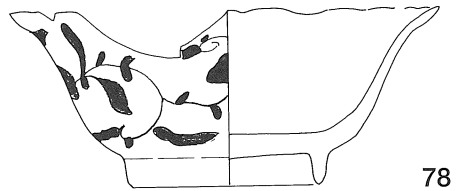
76



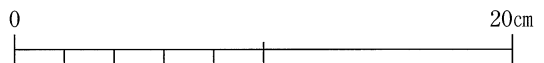
73

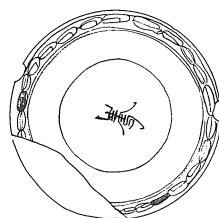
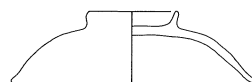
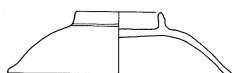
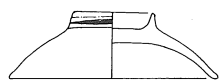


77

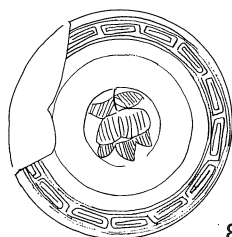


78





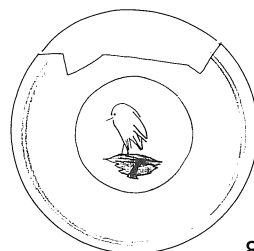
79



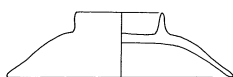
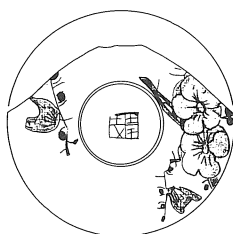
80



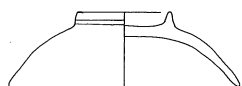
81



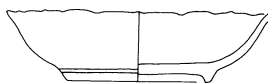
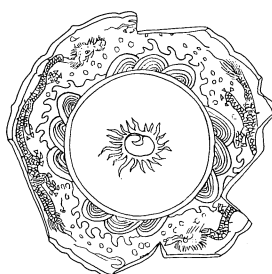
82



83



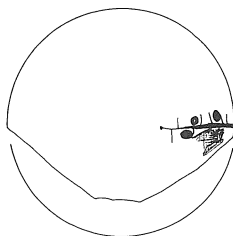
84



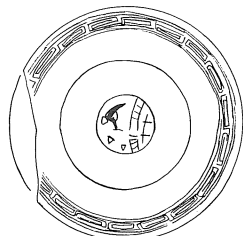
85



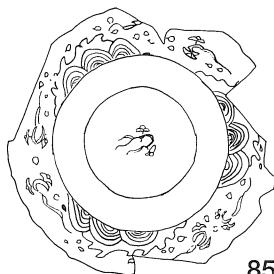
86



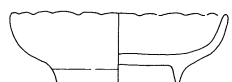
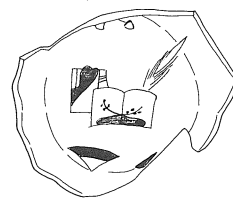
83



84

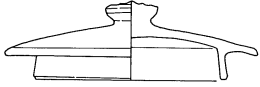
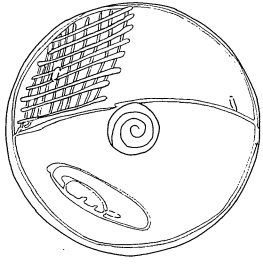


85

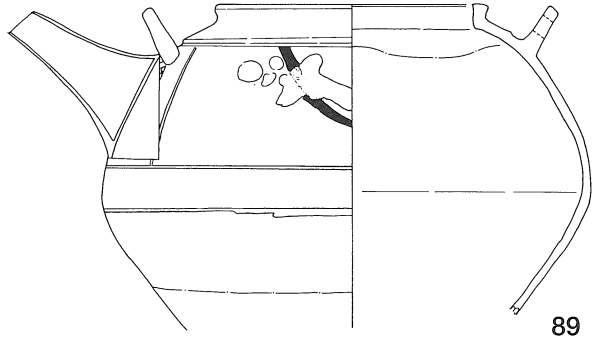


87

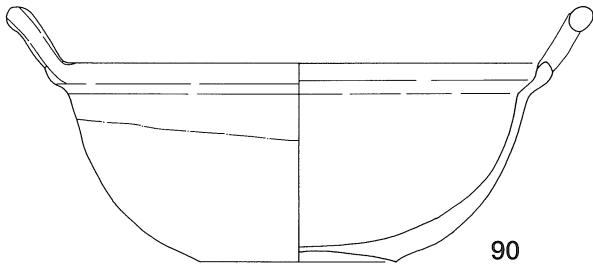




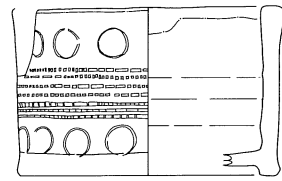
88



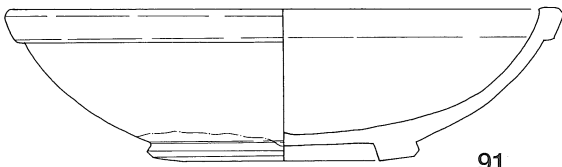
89



90

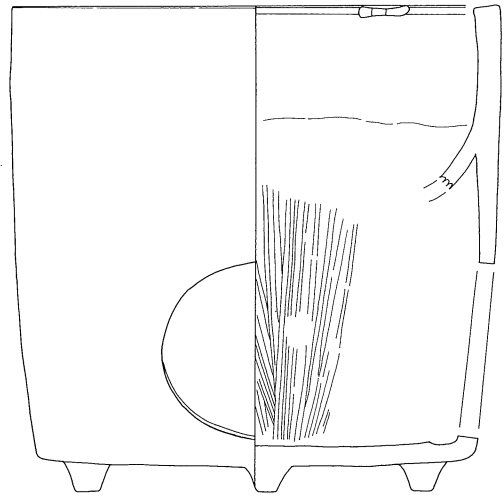


92

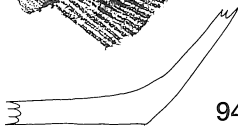


91

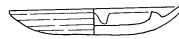
Handwritten signature or mark



93



94



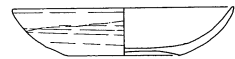
95



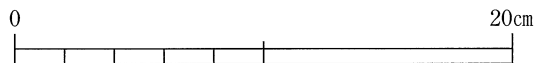
97

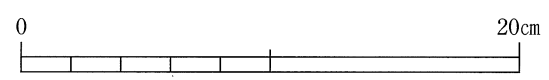
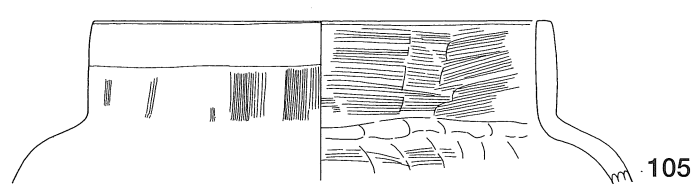
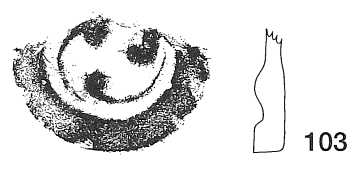
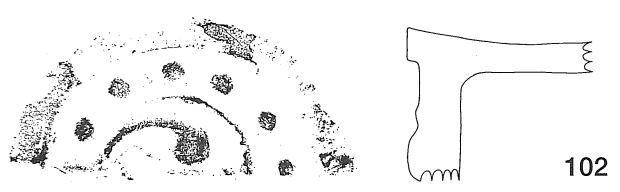
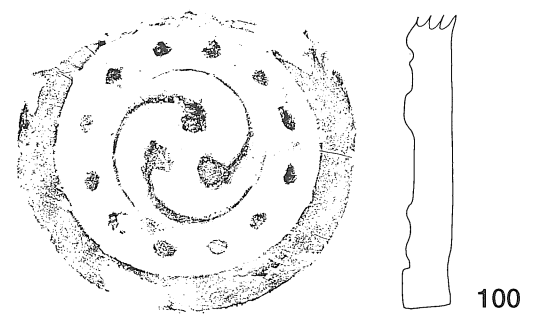
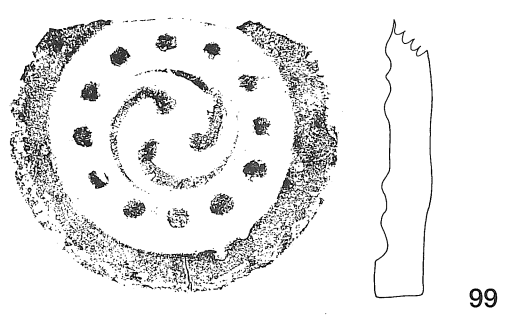


96



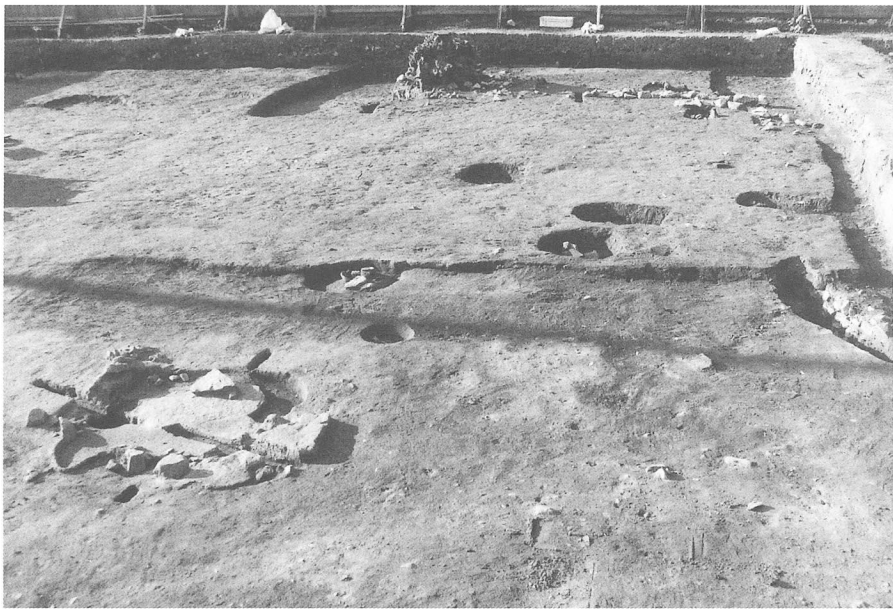
98







調査区東半（東から）



調査区西半（南から）



土坑 1
土坑 2



土坑23



土坑24



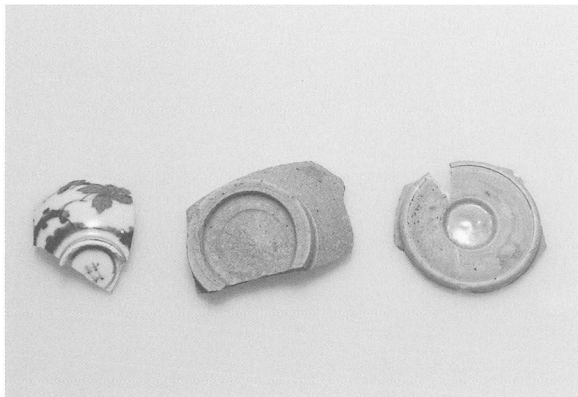
溝 3
土坑30



池泉状遺構



土坑36



1・2・3



5



6



7



11



12



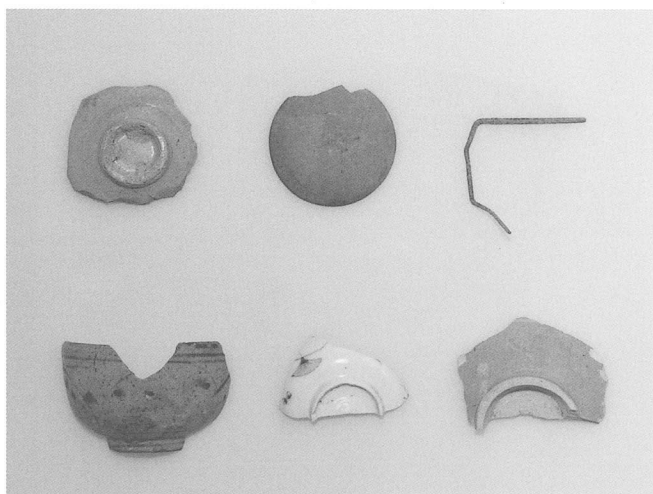
13



17



19



24 · 25 · 26
27 · 28 · 29



31 · 32 · 33
34 · 35 · 37
36 · 41



38
40 · 39



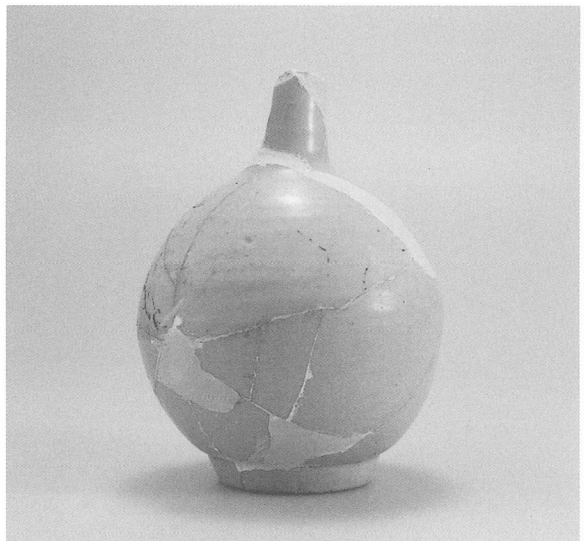
42



43



44



46



47



48



49



50



55



56



60



61



62



65



67



63 · 74 · 77
53 · 70



71



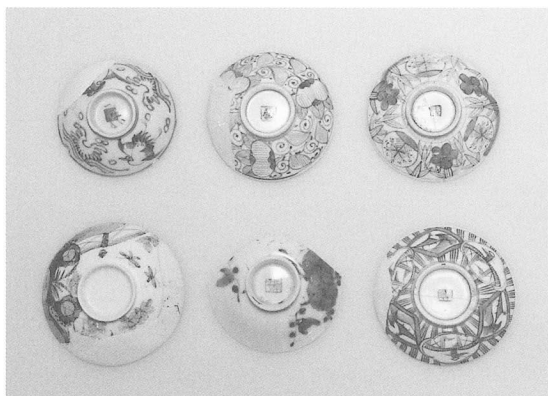
73



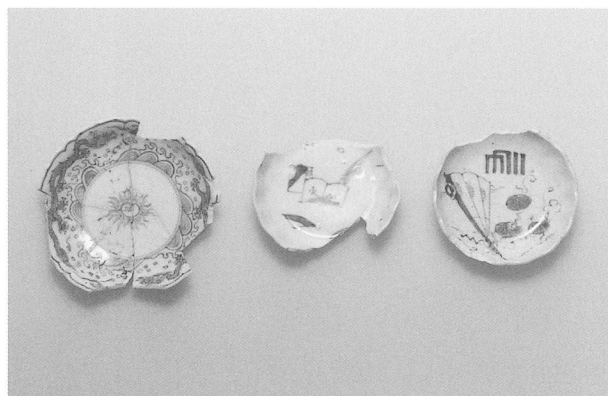
75



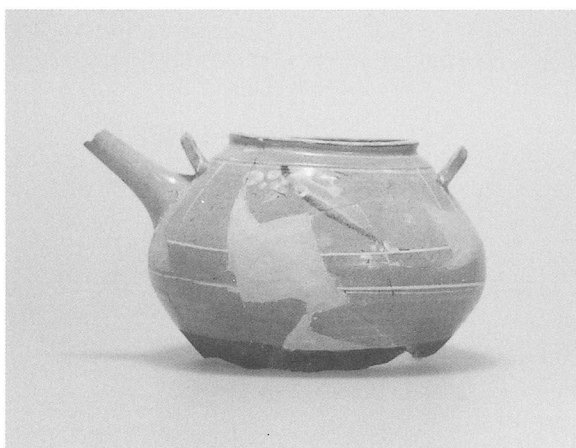
78



79・80・81
82・83・84



85・87・86



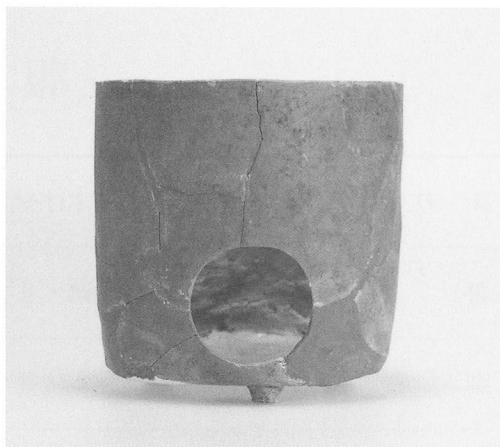
89



90



91



93



96 · 98
95 · 97



99 · 100
101 · 103



104



105 · 106

報告書抄録

ふりがな		あしもりはん ぶけやしきあと						
書名		足守藩武家屋敷跡・II						
副書名		足守小学校プール建築事業に伴う発掘調査						
編著者名		高橋伸二						
編集、発行期間		岡山市教育委員会文化財課						
所在地		700-8544 岡山市大供1-1-1 TEL086-803-1000						
発行年月日		西暦2001年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
あしもりはん 足守藩 ぶけやしきあと 武家屋敷跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 あしもり 足守	33201		34度 43分 30秒	133度 48分 20秒	19940620 ~ 19941017	700	岡山市立足守小学校のプール建築事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
足守藩 武家屋敷跡	生活址	近世	井戸 土坑 溝	近世陶磁器 土師質土器 瓦		武家屋敷地内の土坑、井戸、溝を検出		

足守藩武家屋敷跡・Ⅱ

平成13年3月31日

発行 岡山市教育委員会
岡山市大供一丁目1番1号
制作編集 岡山市教育委員会文化課
印刷 友野印刷株式会社
